

Title	マライ・ポリネシア諸語比較形態論：* β α -再構成の方法
Author(s)	崎山, 理
Citation	大阪外国語大学学報. 23 p.151-p.187
Issue Date	1971-01-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80388
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

マライ・ポリネシア諸語比較形態論

——* $\beta\alpha$ -再構成の方法——

崎 山 理

De reconstructie van het voorvoegsel * $\beta\alpha$ - in de Austronesische talen

Osamu Sakiyama

Bij de vergelijking van de driedelige basische voorvoegsels in de Indonesische talen kunnen we in de eerste plaats *pa-, *paN-, *paɾ-; *ma-, *maN-, *maɾ- en *ba-, *baN-, *baɾ- reconstrueren. Tegenwoordig is er echter geen taal, waarin al de deze voorvoegsels gehouden zijn. Bovendien is het systeem in de Oceanische talen onvollediger. Tegen de aard of toestand van het grondwoord zijn iedere functies als volgt: eerst betekent *-a- daartoe te worden of nog meer lijdelijk te gemaakt worden, vervolgens *-aN- (met de prenasaleering, waarover N. Adriani de naam „Intensief” gegeven heeft) het te doen of daarnaar te koersen en eindelijk *-aɾ- het voortdurend of meervoudig te bezitten. Benevens in beginsel zetten *p-; *m- en *b- respectievelijk de bovengezegde functies in het naamwoord en het overgankelijke of onovergankelijke werkwoord. Bezien we in deze functies en klanken tussen de driedelige voorvoegsels, dan merken we op dat daartussen het verschil niet alleen duidelijk, maar ook wederkerig is. Daarom komen we er hier toe * $\beta\alpha$ - als oudere reconstructievorm voor deze voorvoegsels aan te nemen. Daarenboven ook bij de vergelijking met de Aziatische talen, tenzij men zodanige oorspronkelijkere reconstructievorm gebruikt, een daadwerkelijk succes zal nooit gekregen worden.

Il ne faut pas s'imaginer que, avec des correspondances simples, on touche la réalité des choses. — A. Meillet

単なる対応があるからといって、事の実在が明らかにせられるなどと、考えるべきではない。

I. は じ め に

マライ・ポリネシア諸語の中では、インドネシア語派に属する言語において接辞の種類が最も豊富である。ゆえにインドネシア語派の言語に現われる接辞のみをもとにして、共通マライ・ポリネシア諸語における再構形を原則的に立てることはできるが、それらの接辞の使用法は、現在の言語間において必ずしも一致・並行せず、各言語ごとに幾許かのニュアンスの相違がある。つまり共通祖語からの表現形式を引継ぐ一方で、その内容形式は各言語において個々独立してその意味機能を発達せしめてきたからであって、比較の作業において外的な表現形式面での再構形を設定する努力と同時に、再構形におけるその内的な意味機能をも現在の諸言語の多様な用法の中から明らかにしなければならないことはいうまでもない。このような接辞の中で問題とすべき点を最も多く宿しているものに、再構形として *ma-, *maN-, *mar-; *pa-, paN-, par-; *ba-, *baN-, *bar- を一応与えることができる一連の接頭辞がある。この中の *maN-; *paN-; *baN- は *ma-; *pa-; *ba- のそれぞれの「前鼻音化現象形」 „prenasaleering” であって語根（大部分の場合、第二次の語根＝語基）の語頭音が破裂音・破擦音・母音の場合、それらの音と同器官的な鼻音を接頭辞の間に現出せしめた形であるとされる。¹⁾ しかし、この考え方に従えばそれ以外の音が語頭に立つ場合、*ma- と *maN-, *pa- と *paN-, *ba- と *baN- の区別は原則的に起こらなかったことになるが、この点については検討を要する。この前鼻音化現象の意味的機能については、N. Adriani の考えた「強調」 „Intensief” 説が妥当なものとして一般的に支持せられているが、²⁾ 諸言語におけるこの現象を起こした形の多様な機能の仕方によってその本来の意味を「強調」という概念でしか説明し難いにしろ、やはり共通祖語における文法的意味は明らかにする必要がある。*mar-; *par-; *bar- についても本稿で考察することになるが、要するに上に示した一連の接頭辞が再構せられなければならないのは、その再構された表現形式に応じて、それぞれが異なった文法的意味・機能を持っていたと考えられるからである。R. A. Kern, C. A. Mees が既にこの点に考え到っていることは方法論的に正しい。³⁾

この再構形を導き出し得る代表的諸言語の接頭辞は次のようになる。なお、引用言語のうちカウィ語のみは現代ジャワ語の前身の言語であって文献語である。マライ・ポリネシア諸語における古語として唯一の豊富な資料を持つこの言語の重要性は、本稿においても明らかにせられるであらう。

	*ma- *maN- *mar-	*pa- *paN- *par-	*ba- *baN- *bar-
カウィ語 (Kw.)	[m]a- [m]aN- (mar-)	pa- paN- (par-)	—— —— ——
ジャワ語 (Jv.)	[m]a- ~ $\left[\begin{smallmatrix} ma \\ mə \end{smallmatrix} \right] N-$ (mar- ~ mər-)	pa- paN- (par-)	—— —— ——
トバ・バタク語 (Bt.)	ma- maN- mar-	pa- paN- par-	—— —— ——

タガログ語 (Tg.)	ma- maN- mag-	pa- pəN- pag-	— — —
インドネシア語 (In.)	(^{ma-} _{~mə-}) məN- (mər-)	pə- pəN- pər-	bə- — bər-
ンガジュ・ダヤク語 (Dj.)	(ma-) maN- (mar-)	pa- paN- —	ba- — (bar-)
ガヨ語 (Gj.)	mə- [mə]N- —	pə- pəN- pər-	bə- — bər-
バレー語 (Br.)	mə- məN- — ~me- ~meN- — ~ma- ~maN- —	pə- pəN- — ~pe- ~peN- — ~pa- ~paN- —	ba- baN- —
スندا語 (Sn.)	(ma-) [ma]N- —	pa- paN- pər-	ba- — —

(上において——はその形を欠くこと, () は古形で痕跡的にあるいは方言的に残るもの, [] は実際の使用においてその部分が脱落することもあることを示す。)

II. *ba-, *baN-, *bar-

この系列については、これまで最も問題とせられてきた。I. の表からも分かるように、この接頭辞は、現在、インドネシア語派の中でも限られた言語においてしか機能していない。例えば、In. の場合、*mar- に由来する mər- が痕跡的に残る一方で、bər- にその機能上 *mar- と共通した点が認められるため、ここに音韻変化的には *mar- > bər- を考える説が現われ、そしてまたこの説に従っている人も多い。⁴⁾ しかし、*ma- > mə-, *maN- > məN- があることによって *mar- > bər- と考えるためには、この場合のみ語頭音は例外的変化を行なったとしなくてはならなくなる。ゆえに、W. Aichele は、インドネシア語派の言語には *mar- と等しい機能を持ちつつ mər- 系統と bər- 系統の言語があり、古マライ語の資料では *mar- に由来する mar- しか現われないのは——それは現代語において mər- として痕跡的に残る——その mar- が古バタク語から借用したものであって、古マライ語>インドネシア語は本来 bər- 系統の言語に属するから、ここに共通祖語として mar-/bar- の両形を考えるのである。⁵⁾ もっとも A. Teeuw はこの見解に批判的であって、古マライ語 mar- の借用説に反対する根拠として、古マライ語と現代インドネシア語とは歴史的に連続するものではないとするが、共通祖語における状態には言及していない。⁶⁾

確かに、マライ語史において明らかでない点も多いけれども⁷⁾、諸言語の比較によって *b 系列をも再構形として措定することは妥当である。この系列が言語によっては全く現われず、また、その現われ方が不整合なのは、発生時からその機能において *m, *p 系列と類似・抵触したところが多く、両者が共存する必要がなくなり、一方は次第にその使用を減じ遂に廃れたためであると考えられる。In. の場合、bər- はその基本概念として「所有・所属」を表わす機能があるが、それは同時に「持続」をも表わすことになる。これは古マライ語の mar- と同機能であり⁸⁾、marla-

pas; bərləpas (diri) (逃げる (=開放を持つ, ~に関係する)), marbuat; bərbuat (作る, 行なう) などの例に見られる。後者は現在の In. で〈行なう〉の意味しかなく, 〈作る〉の意味では *maN- に由来する məN- によって məmbuat としなければならないけれども, bərbuat が məmbuat の意味で用いられることもマライ文学では稀ではなかった。⁹⁾ Kw. との関係も古マライ語と同じであり, marapuy; bərapı (火を吹出す), marhyaq; bərtuhan (信心する (=神を持つ))¹⁰⁾ のほか, (*ma->) ma- と機能的に等しい。mānak (=ma+anak); bəranak (生む (=子供を持つ)), [m]ataruq; bətaruq (争う) など。¹¹⁾ また, Sn. における (*ba->) ba- と In. bər- とは等しく, balayar; bərlayar (出帆する (=帆を持つ)), basajkal; bərsajkal (拒む) のような例がある。¹²⁾ (ただし R. A. Kern によれば Sn. のこの ba- は Sn. 語域でも西部にみられる「地域的」 „gewestelijk” なものである。¹³⁾) しかし Sn. (*pa->) pa- の一部ともその機能を同じくしているのであって, patarik-tarik; bətarik-tarik[an] (引張り合う), patenjo-tənjo; bərtinjaw-tinjaw[an] (見詰め合う)¹⁴⁾ などのように, In. bər- に至る *baɾ- の性格は非常に不安定なものであった。このことは *ba-, *baN- についてもいうことができ, Br. のその変化形 ba-, baN- は, 動詞的な *m 系列に概して接近していた In. の bər- とは異なり, 名詞的な *p 系列と等しい機能を帯びている。例えば¹⁵⁾, batapi (泣き虫 (=泣く人)), baginu (飲み助 (=飲む人)) (前者は ba-, 後者は baN- が接頭されている。N. Adriani は後者を単に強調形と考える) は In. の (*paN->) pəN- に等しい「~するもの・人」という概念を持つものになっている。(なお, In. の形は pəngis, pəminum となるが, 後者は語基の語頭音が m であるため前鼻音化現象は起こらない。また, Br. の場合の ba-, baN- には「軽蔑的」 „ongunstig” なニュアンスがあるが In. の pəN- は必ずしもそうではない。) 更に, *baɾ- と共に *ba- を持つ言語は In. のほか Dj., Gj. がある。この場合も先の Br. の ba-, baN- と同じく, 現在, 特に顕著な相違がその間には見られない。ゆえに, 例えば, In. における bə- を bər- の単なる形態音韻論的な異形とする考えが大部分を占め¹⁶⁾, また, Gj. についても bə-, bər- 間の事情は In. と同じように考えられるのみならず, bə-, bər- の機能が m 系列の mə-, mu- と等しい場合すらある。¹⁷⁾ bərakal=m[ə]akal (賢い), bərpiut=mupiut (曾孫のできた)。Dj. においては痕跡的に bar- を残す一方で, barajkat (回復する (=bar-ajkat (高める, 加える))), barapi (煮る (=bar-api (火) api は In. からの借用?, Dj. では apui)), ba- が In. bər- と同機能で用いられる。baanak; bəranak (子供を持つ (Dj. には In. のように〈生む〉の意味はない)), balapas (死ぬ); bərləpas (逃げる)。¹⁸⁾ しかし ba- が In. の məN- と同機能になることもある。basisih; mən'isih (端へ行く, ~へ寄る), bakalah; məgalah (負ける)。

このように *ba-, *baN-, *baɾ- がすべて現われる言語はなく, またその中の二形を保持する言語でも一方が古形であったり, あるいはその間の機能上の差違は全く見られなくなっている。更に, *m, *p 系列と機能的に重なり合うことも多い。要するに, 諸言語における個々の言語事実から *m, *p 系列の体系と等しい再構形を立てることは可能であるが, この *b 系列によって

のみではその内的機能を、現在、最早明らかにし得ないのである。**b* 系列の持っていたその機能上の中間的性格は Tg.——またフィリピンの言語全般にわたって——において全く消滅することになり、また、In. では *m* 系列の消滅した *mər-* を補うものとして生き残り、更に In. のみならず Dj., Gj., Br., Sn. などの *m*, *p* 系列への交錯によってもうかがわれる。

なお、比較言語学において語根と語基との区別は重要な事柄であるが¹⁹⁾、それはマライ・ポリネシア諸語についても同様であって、かつて旺盛に機能した **b* 系列を現在の諸言語の単語中に、すなわち第二次的語根＝語基となつて残している場合が多く、起原的に語根であるものが現在も語根である単語は、In. を例としても擬声・擬態語、叫び声などの *sir* 〈さらさら〉, *čup* 〈止まれ〉などを除いて、稀である。**b* 系列の痕跡も現在の諸言語の単語（語基）の中に豊富にその例を見出すことができる。しかしそこに現われるかつての語根の意味を析出することは、現在においては、相当に困難な作業となる。In. の場合、*barat* 〈西〉（<**ba-ɾat*, **ɾat* は *darat* 〈陸〉の *rat* と関係があるかも知れない）、*bantah* 〈争い〉（<**baN-tah*, **tah* は *muntah* 〈吐く〉の *tah* と）、*bambay* 〈扁平な〉（<**baN-bay*, **bay* は *lubay* 〈孔〉, *čabay* 〈枝〉, *kəmbay* 〈花〉の *bay* と）、*bagkai* 〈死体〉（<**baN-kay*, **kay* は *ragkai* 〈束、房〉, *tapkai* 〈茎、柄〉の *kai* と）のような例は多く指摘することができる。²⁰⁾ Tg. においても *bambay* 〈掘割〉（<**baN-bay*, **bay* は *tambay* 〈網〉, *umbay* 〈（動物が）鼻で掘る〉の *bay* と）、*bagkai* 〈死体〉（<**baN-kay*, **kay* は *lagkai* 〈束、房〉の *kai* と）などその例は多く、いずれも語基として存在するのみである。また **ba-* を含むものとして *balasig* 〈植物名（*Anamirta cocculus*）〉があり *lasig* 〈酔った〉と関係があらう。²¹⁾ Kw.における語基 *bagkiwa* 〈動物名（山鳴）〉もその *kiwa* は Jv. にある *kiwa* 〈醜い〉を含んで合成された形であらう。²²⁾ このように語基における痕跡としての *b* 系列は、最早この系列を持たない言語においても充分にかつてのその存在をうかがい知ることができる。ただ *b* 系列間相互の内的機能の考察のためには、*m*, *p* 系列の研究が欠かせないことになる。

III. **ma-*, **maN-*, **maɾ-*

1. Kw. : Kw. の前鼻音化現象は、語基（語根）語頭音の種類によって次のように行なわれる。*k-* → *ɲ-* は語基の *k-* に *ma-* がつくと *maɲ-* になるの意味。以下そのように。

k- → *ɲ-*; *g-* → *ɲg-*; *č-* → *n'-*; *j-* → *ɲj-*; *t-*, *t-* → *n-*; *ɖ-*, *d-* → *ɲɖ-*, *ɲd-*; *p-* → *m-*; *b-* → *m-*; *ś-*, *ʃ-*, *s-* → *n-*; *h-* → *ɲh-*; 母音- → *ɲ* 母音-; *r-* → *ɲr-*; *l-* → *ɲl-*; *w-* → *m-*; *y-* → *ɲy-*。

この中最後の五個は破裂・破擦音ではなく従って Dempwolff の考えた共通祖語的なものではないが、Jv. にも、また、*w-*, *y-* を除いて Tg. にも行なわれる。また、語頭音が既に鼻音であるような *m-*, *n-*, *n'-*, *ɲ-* については、それらの音に対する変化が全く現われず、前鼻音化現象の有無が確認できない。²³⁾ Kw. の *[m]a-*: *[m]aN-* の対立例は多い。*agəlar* 〈整列する、並ぶ、広がった〉: *angəlar* 〈広げる〉(*gəlar* 〈戦列〉), *makaluɲ* 〈頸に着ける〉: *maɲaluɲ* 〈巻きつく〉(*kaluɲ*

〈頸鎖〉), mačakra 〈鉄環で武装した〉: man'akra 〈鉄環を放つ〉 (čakra 〈鉄環=法輪〉), mađaṇḍa 〈杖で〉: maḍḍaṇḍa 〈打つ〉 (ḍaṇḍa 〈杖=刑杖〉), matəmu 〈出会う〉: manəmu 〈経験する, 得る〉 (təmu 〈出会う, 見つけた〉), maturun 〈に身を投じる〉: manurun 〈降下する〉 (turun 〈下る〉), apayuṅ 〈傘を持って〉: amayuṅ 〈隠れる〉 (payuṅ 〈傘〉), maban'čana 〈誘惑する, 唆かす〉: maman'čana 〈欺く〉 (ban'čana 〈偽, 騙〉), asakit 〈悩まされた, 害された〉: manakit 〈悩ます〉, mahulun 〈奴隸を持つ (=王)〉: maḥulun 〈を召使とみなす〉 (hulun 〈奴隸, 召使〉), mālap (<ma-alap) 〈さらわれた〉: maḥalap 〈捕える〉, marəbut 〈戦う〉: maḥrəbut 〈攻める〉, alayaṅ 〈翼のある〉: aḥlayaṅ 〈飛ぶ〉, awuwus 〈云われた〉: amuwus 〈云う, 話す〉 (wuwus 〈言葉〉)。以上は H.H. Juynboll の語彙集²⁴⁾ からの一部であるが, まだほかにも例は多い。[m]a- の持つ基本概念は「語基の持つ性質・状態にその発話の時点においてなる, または, なっている」と定義することができよう。これに対して [m]aḥ- は「語基の持つ性質・状態にする・行なう・向かう」の意味を持つといえる。一般的に言えば, 前者は形容詞・副詞・受動的であり, 後者は (他) 動詞的である。前者が In. の bər- と等しい機能を持つことがあったのは (II. 参照), bər- が「所有・所属」を示し, 語基の状態を帯びる, 語基の状態になる点で共通した機能があったからである。ゆえに後者では必然的に他動詞化の接尾辞を更に取り取ることも多く, 語基 panas は mapanas 〈暖くなる〉に対して mamanasi 〈暖める〉となり, 語末の -i はそのような接尾辞である。前者にはこのようなことが起こらない。

Kw. の mar- は文献的にはわずかの語にしかその使用例がない。しかし, それでも語根 hyaṅ 〈神〉に対して ahyāṅ 〈神々しい〉: [m]aḥyaṅ 〈乞願う〉のほか, marhyaṅ があり 〈信心する (=神を持つ)〉から更に 〈寺僧〉の意味にもなる。apuy 〈火〉も maḥapuyi 〈燃やす, 刺激する〉があるほか, marapuy 〈火を吹出す〉の形がある。次は Mahābhārata 第 I 部 Ādiparwa からの数少ない一例である。²⁵⁾

Mararyan ta sang watēk dawatā, mangangēn-angēn ta bhaṭāra Wiṣṇu i mārga ning amṛta kālāpa de nira. 〈神々は止った (語基 ari 〈止む〉) に名詞化の接尾辞 -an がついて ari-an > aryan (停止, 中止 (=止むこと)) となったもの。原意は 〈停止を持つ〉)。そこでヴィシュヌ神 (=毘紐神, 那羅延天) は甘露 (=天酒) が神々によって獲得されるための方法を考えた。)

mar- は「語基に示された事柄を所有する」の意味があった。また, そこには「持続」の気持がはいる。それは In. bər- の持っていた機能と同じである。ゆえに In. は (*mar->) mər- を別の機能を持つものとして特に保持する必要はなかったし, また Kw. に *baṛ- に由来する接頭辞がないのもそのためである。更に Kw. mar- はその意味的機能において [m]a- によって代置せられることも多かった。例えば先の Ādiparwa に ari は māri (<ma-ari) としても現われ, むしろこの方が普通である。

Mangke tēmbē yan ibungku māri huluna denta, haywa ta kita sikāra.²⁶⁾ 〈今や私の母がお前によって奴隷とされることを止める時となった (奴隷とされることにおいて止む)〉

mar- は記録上、その現われる例が少ないが、それをもって mar- の使用が殆んどなかったとは断定できない。Jv. に mar-, mər- として残る古形には、Kw. の文献が現われないものもある。margiyuh 〈厄介な〉, mǝgawe; mǝdaməl 〈働く (=仕事を持つ)〉 などその例も多いが、現代語的には margiyuh は susah であり、mǝgawe; mǝdaməl も magawe; madaməl となるが、現在は意味が縮小されて 〈畑仕事をする〉ことである。(Kw. でも magiyuh, magawe が普通の用法である。)

2. Jv. : Jv. の前鼻音化現象は、語基 (語根) の語頭音の種類によって次のように行なわれる。Kw. の場合と大きく異なる点は、*maN- における *ma の部分がすべて脱落する。k- → ɣ- は語基の k- にこの現象が起こると ɣ- になるの意味である。以下そのように。ただし、ジャワ文字の上でこれらの現象を持つ語は、aN- と書かれる場合もあるが、この a- は普通発音されない。²⁹⁾

k- → ɣ-; g- → ɣg-; č- → n'-; j- → nj-; t-, t- → n-; d-, d- → nd-, nd-; p- → m-; b- → mb-; s- → n'-; 母音- → ɣ 母音-; h- → ɣ²⁸⁾; r- → ɣr-; l- → ɣl-; w- → ɣ-; y- → ɣy-.

Jw. における [m]a-, [ma]N- の相違は Kw. の [m]a-, [m]aN- と等しく、その間の違いは特に存在しない。ジャワ語文法では前者は「状態形」„Rimbag Bawa”, 後者を「動作形」„Rim-bag Tanduk” といっている。²⁹⁾ また mar-, mər- については 1. で触れたように古形として存在するのみである。その若干の例、akəmbaɣ 〈開いた、咲いた (=花を持つ)〉 : ɣəmbaɣ 〈花のような (=花にする)〉 : ɣəmbaɣi 〈花で飾る〉, maguru 〈の徒弟となる〉 : ɣguru 〈の例に倣う〉 : ɣguronī 〈を師と呼ぶ〉 (guru 〈師〉), magawe 〈畑仕事をする〉 : ɣgawe 〈作る〉, maɖepo? 〈住む〉 : ndepo? 〈地面に坐る、横たわる〉 (ɖepo? 〈地面、居所〉) atagan 〈手のある〉 : naɣani 〈掴む、自ら行なう〉 (taɣan 〈手〉), adoh 〈遠い〉 : ndohi 〈遠ざける〉, arupɔ 〈の形・姿を持つ〉 : ɣrupa?ake 〈備える、実現する〉 (rupɔ 〈形状〉), malaku 〈行く、歩く〉 : ɣlakoni 〈行なう〉 (laku 〈道、道程〉), mobah 〈変る〉 : ɣobahake 〈変化さす〉 (obah 〈動き〉), awet 〈丈夫な〉 : ɣawetake 〈丈夫にする〉。³⁰⁾

なお、[m]a-, [ma]N- ~ [mə]N- が現在の語基の中に合成されてしまって、それら接頭辞を切離し得ないものもある。agəɣ 〈大きい〉 (Kw. göɣ), atis 〈寒い〉 (Kw. tis), adus 〈水浴〉 (Kw. dyus), alon 〈遅い〉 (Kw. lon), 更に, maɣan 〈食べる〉 (<*maN-kaʼən, Tg. k[um]ain), aɣgəl 〈堰〉 (<*aN-gəl, *gəl は ugəl 〈関節〉, tugəl 〈切断した、横切った〉, təngəl 〈真中に向かう〉, wagəl 〈障害〉などの gəl によって), ampət 〈保持〉 (<*aN-pət, *pət は umpət 〈隠された〉, rəpət 〈曖昧〉, səpət 〈不快な〉, čupət 〈不十分な〉などの pət によって), məntaɣ 〈引張る〉 (<*məN-ɬaɣ, 現在形が *mənaɣ とならなかったのは、この形が前鼻音化現象の初期の段階で固定したまま伝わったからである。In. bəntaɣ 〈広げる〉, Jv. lanɬaɣ 〈脇目もふらず歩く〉の ɬaɣ によって), aɣkul 〈軸、釘〉 (<*maN-kul, 現在形が aɣul とならなかったのは、上に述べたのと同じ理由による。pikul 〈背負荷〉, tuɣkul 〈服従する〉, uɣkul 〈越えた〉などの kul によ

て)。³¹⁾

なお, Kw. の場合と同様に, Jv. でも上の例に示したような [ma]N- ~ [mə]N- 形では更に他動詞化の接尾辞 -i, -ake を取るものが多いこと, また *maN- の *ma を一般的に落とすにもかかわらず, 落とした形のほか落とさない形も残しておりその両者が等しく現われる場合もあることを付記しておく。məgidul, gidul (南へ行く) (kidul (南)), məgisor, isor, (下へ降りる) (isor (下)), mənɗuwur (上へ上る) (nɗuwuri (上へ伸ばす)) など。

3. Tg.: Tg. の前鼻音化現象は, 次のようになる。k- → ŋ- は語基 (語根) の k- に ma- がつくると mag- になるの意味。以下そのように。

k- → ŋ-; g- → ŋg-; t- → n-; d- → n-; p- → m-; b- → m-; s- → n-; h- → ŋh-; 母音 → ŋ 母音-; r- → nr-; l- → nl; w- → ŋw-; y- → ŋy-。

Tg. には č-, j-, t-, d-, ś-, ʃ- がないのでそれらを除いてこの現象は Kw. と大体等しい。(ただし Kw. d- → ɗd-; r- → ɗr-; l- → ɗl-; w- → m- に比べてそこに若干の相違はある。) しかし Kw. にはこの現象が最早確認できなかった m-, n-, ŋ- (n' は Tg. には存在しない) にも行なわれるのが特色であって, それぞれ ɗm-, ɗn-, ɗaŋ- となる。要するに Tg. の持つすべての音素にわたってこの現象は現われるのである。なお, 上の変化表にもかかわらず k-; t-; d-; p-; b-; s- は ɣk-; nt-; nd-; mp-; mb-; ns- のようにむしろ古形的に鼻音を残して現われることもあるが, 後者は, 現在, 語基となって固定化した語中に保たれている場合が多い。dali? (迅速) ~ sandali? (瞬間), ganti (報い) ~ gantimpala? (報酬), buboŋ (屋根) ~ tambuboŋ (穀倉群), dagan (〜というのは, のために) ~ kundagan (同意), kilik (背負った) ~ taŋkilik (支持, 庇護) など。更に mag- がすべての語基 (語根) に対して現われ, *ma-, *maN-, *maŋ- が最も完全な体系のもとに行なわれるのは, この Tg. である。この三個の接頭辞について maN- が mag- より変化してできたように考える J. V. Panganiban の誤りはもとより³²⁾ —例えば manulat (著作する (=職業として書く)) の -n- は magsulat (書くことに従事する) の -g- が取替ったとする —, この maN- について全く触れることがない R. Alejandro, P. S. Aspillera などの文法書が不完全であることはいうまでもない。³³⁾ また, 比較的詳しくこの種の接頭辞を掲げている辞書として M. Cruz / S. P. Ignashev のものがあるが³⁴⁾, maN-, mag- をシノニムのように扱っている例が多く —例えば magsulat, manulat を共に (書く, 著作する) とする —これでは正確を期し難い。この三形によって完全な対立を示す語は少ないけれども, それでも例えば次のような例がある。(Tg. には弁別的に機能する stress accent があるが, 本稿では特に必要な場合のほかはその標記を省略する。)

Hindi ko maputol nang kamay ang bakal na ito. (私は手でこの鉄塊を壊し(切り)得ない)

Huwag kayo ng mamutol nang kawayang hindi ninyo ari. (お前達の所有物ではない竹について(に関して)お前達が伐採し(多量に、職業的に選んで切っ)てはいけない)

Magputol ka, Pedro, nang manga (mga) kugon, upang luminis ang bukid. (畑が奇麗になるように、ペドロよ、お前がクゴン草 (*Imperata cylindrica*) について(に関して)切れ(切ることに携われ))³⁵⁾

まず、*ma-*についてこれが語基の「情況・状態・性質となること」を基本概念として表わすことは既にいわれていることである。³⁶⁾つまり *Kw.* の *[m]a-*, *Jv.* の *[m]a-* とは機能的に等しい。*mabuti* (良い) (*buti* (良さ)), *maganda* (美しい) (*ganda* (美)), *maalat* (塩辛い) (*alat* (塩辛さ)), *magiliw* (ねんごろな) (*giliw* (愛する人)) など。これらはすべて形容詞的であるけれども、一方、語基の種類によっては動詞的になることもある。その際も自動詞であるのが一般的であって目的語は取り得ない。*matulog* (眠る), *maupo?* (座る), *matakot* (恐い), *mahiya?* (恥ずかしい), *malungkot* (悲しい)。しかし、語基が既に他動詞的意味を持つ場合 '*ma-* がつくことによって、目的語を取ることができないのであるから、必然的に受動的機能を持つものへと転化する。またそのような「受動性」は「可能性」をも帯びることになり——日本語のレル、ラレルが受動と同時に可能をも示す助動詞であることに等しい——、文法的説明として「潜在的能力」“potential ability”, 「予測性」‘непреднамеренность’ を示すともされる理由である。³⁷⁾ 同じく *E. Wölfenden* がその薄い冊子ながら *Tg.* の接辞 をシンタックスの面から相互的・有機的連関性のもとにまとめた好著において、「話題」“topics” と動詞との関連の仕方によって次に触れる *maN-*, *mag-* を「主語態」“subjective voice” に含めるのに対し、*ma-* を「傾向態」“aptative voice” とし「話題が、動詞語幹 “verb stem” によって示された行為をこうむることができる」ということ、また、様態的には「存在の状態」を表わすと説明しているのも、要するに上に述べたことを簡潔にいつているのである。³⁸⁾ (最近の文法書では、*maN-*, *mag-* を「行為者中心」“actor focus”, *ma-* を「目的語中心」“object focus” ともする。³⁹⁾) さて、例文に示した訳文も実際には〈この鉄塊は私によって手で壊れた(切った)状態にされることができない〉ということであって、語基の性質によっては **ma-* がつくことによってそれが受動的意味を帯びる至ることは、*Kw.* でも既に見られたことである。*mālap* (＜*ma-alap*) (さわられた), *awuwus* (云われた), *agalar* (広がった (= 広げられた)), *asakit* (悩まされた) などのほか、*mawaka* (子供を持つ、産む) は更に〈子供とみなされる〉の意味にもなる。*Tg.* ではこの *ma-* (アクセントなし) のほか、アクセントのついた *má-* があり、この場合は特に「不随意的・無意図的・偶発的に行為がなされること」を表わす。*mákita* (見える), *mátulog* (ふと眠りに落ちる), *máhuli* (捕らえられる)。このような *má-* は *Tg.* にしか現われず、マライ・ポリネシア諸語においても後次的発生にかかわるものである。*máputol* の例を次に掲げておく。

Hindi nya máputol ang leeg nang manok. (鶏の首が彼にははねられ(どうしても切れ)なかった)⁴⁰⁾

次に *maN-* については「反復的・習慣的行為」を表わすのが基本概念であるが、更に「規則

的行動「регулярное действие」からひいては「職業としての行為」を表わすようになる。⁴¹⁾ Kw. では特にこのような意味の特殊化は見られないけれども、「語基の持つ性質・状態にする・行なう」点では共通している。また、行為の主体＝行為者も明瞭である。なお、行為はより故意的・意図的であって、その行為は不特定多数の目的語に及ぶことが予期される。⁴²⁾ 次の mag- と共に E. Wolfenden は「主語態」とし「行為の発動者（行為者）が話題である」とするもの⁴³⁾、このためである。その例は先の manulat 〈著作する〉のほか、manawag 〈説教する〉(tawag 〈叫び〉), magaral 〈布教する〉(aral 〈助言, 忠告〉) magharap 〈強盗を働く〉(harap 〈障害〉), mambatak 〈影響を及ぼす〉(batak 〈引くこと〉), mamigay 〈配る〉(bigay 〈贈物〉) など。

mag- は Tg. において多様な機能を示すに至っており、人によってその定義の仕方も様々である。単に「行為」「外的運動」「external motion」を表わすという説明も、E. Wolfenden の「包括的行為」「comprehensive action」という規定⁴⁴⁾ も、もとより曖昧である。まずその例を示そう。

magsulat 〈書くことに携わる〉, mag[?]aral 〈学ぶ〉, magharap 〈邪魔する〉, magbigay 〈与える〉, magluto[?] 〈料理する〉(luto[?] 〈料理〉), magbili 〈売る〉(bili 〈購入〉, mabili 〈良く売れる〉), maghagad 〈熱望する〉(hagad 〈意図〉), maggawa[?] 〈作る, 製造する〉(gawa[?] 〈仕事〉, magawa[?] 〈作られ得る〉), magtanim 〈植える〉(tanim 〈植物〉, matanim 〈植物の生長した〉)。

mag- は maN- と比べて行為における意図・故意性、選択性、職業性の表示がより低いということはいえよう。⁴⁵⁾ 語基の行為はむしろ一般的なものとして示される。この意味では「包括的行為」である。しかしここに明らかなことは、maN- が語基の意味を他の不特定多数に及ぼすことに本来の機能があるに反して、mag- は「語基の意味に関係する・携わる、語基の事柄を所有・保持する」ことを表現するのであって、そこにはまた「持続」の意味があり、この点が maN- と mag- との機能上の大きな差である。(もろもろの Tg. の文法書においてこの点を指摘しているものはなく、人をして惑わしめるものがあった。) ただし、ほかの(他)動詞化の接辞と、結果として生ぜしめられた意味の用法においてその区別が定かにし得ない点があるために、maN- と mag- とをシノニムのように扱う辞書も多いほか、同じく動詞化の接中辞 -um- といずれも行為者または行為そのものが強調される点において機能的に等しいと考える人もいる。^{45-a)} しかしこの -um- は、Kw., Jv. の -um- と対応するものであるが(註29参照)、語基の動詞化をはかるその機能において単純な行為・過程を示すにとどまり、mag- にみられるような外部へ影響する行為の運動は存在しない。⁴⁶⁾ 要するに、語基みずからの範囲内での動きであり、「内的行為」「internal act」である。⁴⁷⁾ dumami 〈増える〉(dami 〈量〉), tumaba[?] 〈肥える〉(taba[?] 〈肥え〉), sumulat 〈書く(＝執筆においてある)〉(sulat 〈書くこと〉), umaral 〈訓育する〉(aral 〈忠告〉), dumala 〈になう(＝荷においてある)〉(dala 〈荷〉, magdala 〈運ぶ〉), bumalik 〈戻る〉(balik 〈帰り〉), magbalik 〈帰る〉)などのほか、

Pumutol ka ba nang damo para sa kabayo? 〈お前は馬用の草について(に関して)刈っ

(切っ) たのか? (=お前は馬にやる草を刈ったのか?)⁴⁸⁾

のように putol にも -um- がつき得て、〈切る (=切ることにおいてある)〉となる。maN-, mag-, -um- の機能は、おのずから異なっている。ただその差違が微細な場合、文法的な言葉でうまく説明できないだけのことである。mag- の持っていた「持続的な関係性・所属性」の表示は、名詞となって固定した、mag[?]ama 〈父子 (=父と関係する)〉 (ama 〈父〉), mag[?]ina 〈母子〉 (ina 〈母〉), mag[?]asawa 〈夫妻〉 (asawa 〈夫, 妻〉), Magsaysay 〈人名 (=宣言を持つ)〉 また、語基の語頭音重複現象“partial reduplication”を行なった語と共に、magbibigas 〈米屋 (=米に与る)〉 (bigas 〈米〉), magsusulat 〈書記〉 (sulat 〈書くこと〉), magnanakaw 〈盗人〉 (nakaw 〈盗品〉), magsasaka 〈農夫〉 (saka 農事) などの語に見られ、その本来の機能を表わしている。

4. In. : In. の前鼻音化現象は、語基 (語根) の語頭音の種類によって次のように行なわれるが、Kw., Jv., Tg. の場合と異なって、この現象は文法的に必須なものとして要求され、従ってこの現象を起こさない表現法は存在しない。つまり In. からは *ma-, *maN-の機能上の差違を、最早、明らかにし得ない。まずその現象は次のようになる。k- → ɣ- は語基 (語根) の k- に mə- がついて məɣ- になるの意味。以下同様に。

k- → ɣ-; g- → ɣg-; č- → nč-; j- → nj-; t- → n-; d- → nd-; p- → m-; b- → mb-;

s- → n'-; 母音- → ɣ母音-; h- → ɣh-. なお、例外的に r-, l- → ɣr-, ɣl-.

その他、新しい外来語音の f-, v- は mf-, mv-, š-, z- は nš-, nz-, x- は ɣx- となるけれども、これ以外の他の子音ではこの現象は起こらず、Kw., Jv., Tg. に比べてこの現象に関与する子音は破裂・破擦音に限られている。Dempwolff の措定した共通祖語の再構形は、この In. によって導かれた点が大きいが、共通祖語のより古い段階においてもそのようであったとは断言できないことが Kw., Tg. などの現象から考えても明らかである。しかし、現代 In. の現象による限りでは、この現象はいかにも形態音韻論的に出現するのみであり、またその形態音韻論的現象を引起した原因として、N. Adriani は「強調」を考えたわけであるけれども、現在の In. の語基として痕跡的に残るこの現象を起こした形と起こさない形のみからは、その機能を明確に推論することは難しい。なぜならそこではこの現象の生きて働く様子がうかがえないと同時に、現在の語基の一部となったかつての語根の意味の究明がまだ完全にできていないからである。例えばその例。maɣkat 〈逝去する〉 (<*maN-kat, *kat は aɣkat 〈持上げる〉, paɣkat 〈地位, 階級〉の kat), məkar 〈咲く〉 (<*ma-kar, *kar は bəɣkar 〈開く〉の kar), malam 〈夜〉 (<*maləm, *ləm は kələm 〈暗い〉, silam 〈暗い〉, təɣgələm 〈沈む〉の lam), masuk 〈入る〉 (<*ma-t'uk, *t'uk は tusuk 〈突く〉の suk), məlar 〈拡張〉 (<*malaɣ, *laɣ は ɣalar 〈ほう〉, ular 〈蛇〉の lar. Tg. laglag 〈落ちた〉参照), makan 〈食べる〉 (<*makaən, *ka'ən は ik'an 〈魚〉, pakan 〈横糸〉の kan. Tg. k(um)ain 〈食べる〉参照) などその例は多い。ここに現われた mə-(ma-) に対して、現在、全く接辞の意識はないのであって、特に動詞形の場合これを語基として新たな mə- をつけることすら行なわれる。

Tapi mereka tidak sadja memakan makanan orang, tapi djuga makanan andjing sudah sedap pula oleh mereka. 〈しかし彼等は人間の食物を食べたのみならず、犬の食い物ですら味わたのだった〉⁴⁹⁾

現在, In. の mən- は Kw. の [m]aN-, また In. bər- が Kw. [m]a- と原則的に等しい機能で用いられているが、しかし mən- には Kw. [m]a- に見られたような形容詞・副詞的機能を持つ場合も多いのであって、mən- の機能する範囲は大変広い。例えば、語基を(他)動詞化する mēludah 〈唾を吐く〉(ludah 〈唾〉), mēgekor 〈追従する〉(ekor 〈尾〉), mēndəgar 〈を聞く〉(dəgar 〈聞く〉), mēniggi 〈高まる、高める〉(tinggi 〈高い〉) などのほか、mēndalam 〈深い〉(dalam 〈深い、内ら〉, Kw. adaləm 〈深い〉), mēndiri 〈独立の〉(diri 〈自身〉) また次の文中の例も形容詞的に用いられている。

Biar merekaitu tetap melarat dan bodoh! 〈彼等を貧しく愚かなままにしておけ〉⁵⁰⁾

Kongres2 tsb., karena berbagai faktor, karena keterbatasan2 historis, belum sempat menjusun program Partai jang menjeluruh. 〈上述の会議は、種々の要因や歴史的制限によって、いまだ全体的な党の要綱を編む時機に至らなかった〉⁵¹⁾

これらは、それぞれ larat (Kw. larad 〈減った〉), seluruh を語基とするものであるが、このように mən- の中にはかつて bər- を取ったものも含まれ、mənari 〈踊る〉(bərtari), mēlompat 〈飛びはねる〉(bərlompat), mən'umpah 〈誓う〉(bəsumpah)⁵²⁾, mən'an'i 〈歌う〉(bərn'an'i), mən- の機能の拡大化が見られる。

更に, mər- については II. において bər- との関連性のもとに述べた事柄のほかに, mər- を古形として痕跡的に残す語にはまず植物名が多く, mərbau 〈鉄木の種類 (= 匂いを持つ)〉, mərlimau 〈橙の種類 (= 蜜柑を持つ)〉, mərbulan 〈黄桐の種類 (= 月を持つ)〉, mērpitis 〈黄牛木の種類 (= 銭を持つ)〉, mērajaguj 〈玉蜀黍の種類 (= 玉蜀黍の実を持つ)〉などのほか、また一般的な mērapuj 〈浮く〉, mēruap 〈沸騰する〉, mērubu 〈芋 (ubi) 形の短剣の柄〉にも残る。ただし、現在では mērapuj, mēruap のように mən- をもってするのが普通である。しかし、古形の mər- が現在の bər- と機能的に等しいと考える意識が残っており、bər- とすべきところを強いて mər- と書いている例もある。

Apa perlunja ia merubah nama dan memakai serban, rupanja tidak pernah mendjadi pertanjaan baginja. 〈どういうわけで彼が名前を改め (= 相違を持つ), ターバンをかぶったのか、彼に尋ねたことはなかったようだ〉⁵³⁾

5. 爾余の言語 については簡単に触れておく。まず Sn. においては、事情は In. とほぼ等しく、実際に機能するのは [ma]N-, ba- しかない。ゆえに前鼻音化現象を起こす起こさないの決定を、言語使用者の意志に任せられることはない。ba- は大体において「所有・状態」を示し、[ma]N- は「行為」を示す。basapkal 〈拒む〉(In. bərsapkal): n'apkal 〈否定する〉(In. mən'apkal), balayar 〈出帆する〉(In. bərlayar): galayarkyn 〈航行させる〉(In. mēlayarkan), bagilir 〈交互に〉(In.

bərgilir) : pəgilir (廻る) (In. bərkisar, In. *məggilir とはいわない)。ただし、ba- は R. A. Kern も「地域的」というように、標準 Sn. では In. bər- におけるような使用上の旺盛さはなく——In. bər- はむしろ Sn. pa- に相当することが多い (II. 参照)——また、既に固定化して語基として存在する場合が多い。badarat (歩く) (darat (陸)), bakətrak (非常に固い) (kətruk (コツンという音)?)。Gj. では mə-(mu-), [mə]N- の区別があるが前者は形容詞的に「所有」を表わし——また、それは bə-, bər- と共通した機能を持つこともある (II. 参照)——後者は「能動的な行為」を表わす。mutukör (取換えた) : nukör (交換する), mubətih (有名な) : mətih (知る), mukuruk 掘った) : pūruk (掘る), mēluah (緩んだ) : mēnluah (緩める), mukö (開いた) : nukö (開く) (語基 ukö)。Dj. は marapi (煮る) (<mar-api (火)) のような古語のほか、ma- も痕跡的に残るにすぎない。manis (甘い) (anis (甘い)), malinus (滑らかな) (linus (滑らかな))⁵⁴⁾, masuloh (発芽する) (suloh (芽))。maN- は他動詞化の機能があり、形容詞化の ba- と対立的に用いられる。mamuti (白くする) : baputi (白い), bakandoy (囲まれた) : mağandoy (囲む) など。Br. には *ma-, *maN- に由来する接頭辞がそれぞれ三個ある。後次的な母音交替によってこれらの形が生じたと考えられるが、そのうちの mo- は Tg. mag-, In. mər- などと同じく *mar- に由来すると N. Adriani は考えている。⁵⁵⁾ しかしこれは音韻変化的に見ても、また、mo- に moN- があることから無理であろう。ただし、彼は前鼻音化現象を単に「強調」形とするから、彼の理論上からは矛盾するわけではない。それぞれの機能は mo- が自動詞、me- が形容詞、ma- が他動詞形 (時に、自動詞形) を作り、また各々に「強調」形がある。mopalu (ハンマーを持つ) : mompalu (铸造する), mewua (果物のような) : membua (沢山の果物を持って) (wua (果物)), matima : mantima (取る)。⁵⁶⁾ 要するに Br. では共通祖語の *ma-, *maN- においてあった機能を更に個々の接辞の分化によって細分化して分担せしめているのであり、それは共通祖語における機能そのものが非常に流動的でいまだ定形化しない状態にあったことを意味している。しかし共通祖語の状態を比較的留めると思われる言語に Tg., Kw. のほか、Bt. がある。その ma- は「状態」を示すほか、matombuk (孔のあく), mabugay (傷つく), madabu (落ちる), 形容詞 (特に述語的に) となる, marara (赤い), matimbo (高い), madeggan (清潔だ)。maN- は自動詞形を作ると同時に, manun'jay ((鉄砲を発射した後で) 後へのめる) (語基 tun'jay (蹴る), In. tənday), mağəmbay (開く) (語基 kəmbay, In. kəmbay), mamottar (白くなる) (語基 bottar (白い)), 他動詞ともなる, mandabu (落とす), mamodil (発砲する) (語基 bodil (鉄砲)), magultop (吹矢で射る) (語基 ultop)。mar- は「所有・所属・関与を持続的に示す」自動詞となる, marhoda (乗馬する (=馬を持つ)), marrara ((沢山の果物が熟れて) 真赤になっている), marabit (着る) (abit (着物))。ただし、mar- が形容詞的語基と結合することによって、それが関係する名詞が複数であることを示すのは、同じく「持続性」と関係するもので行為の量的多数を表わしたことに由来するのにはほかならない。上の marrara のほか、marmokmok ((沢山の牛が) 肥えている) もその例である。⁵⁷⁾

IV. *pa-, *paN-, *par-

*m 系列は概して形容詞・動詞的に機能したのに対し、*p 系列は大体、それを名詞化する働きがあるといえることができる。しかし *p 系列に属するそれぞれの接頭辞は、各言語においてその機能の仕方が同じではなく、それは *m 系列の場合と比べてその程度はより著しい。例えば、In. で語基 *buat* (為す) に (**par-*>) *pər-*, (**paN-*>) *pəm-* を附することによって *pərbuatan* (行為), *pəmbuatan* (製造) (語末の *-an* は同じく名詞化にする接尾辞) となり、意味はそれぞれそこに示したような違いがある。(これはそれぞれ動詞形 *bərbuat* (行なう), *məmbuat* (作る) と対峙するもので [II. 参照], その名詞化 (行なうこと=行為), (作ること=製造) が行なわれたのである。前者は語基の持つ意味の「結果」に、後者は「過程」に重点を置く趣がある。) これに対して Jv. では *paggawe* の一語をもって In. の二語の意味を同時に表わすのは、Jv. で最早 (**par-*>) *par-* が生きて働かないためでもあるが、Tg. でも同じく (**par-*>) *pag-* を取った *paggawa?* の一語のみが In. の二語の意味を表わす。(Jv. *gawe*, Tg. *gawa?* は **gawa*[y] (仕事) に由来し、In. では *pə-* と共に固定化した *pəgawai* (事務員, 役人) にその形が残る。) しかし Tg. には (**paN-*>) *paN-* がある。この *paN-* は *paggawa?* となることによって (道具, 器械=働くもの, 行なうもの) となるが、それは In. の *pəmbuatan* とはもとより、また *-an* を取らない *pəmbuat* (製作者) とも既に意味のずれがある。更に In. では **pa-* に由来する *pə-* によって **pəbuat*(*an*) とはいえないけれども、Tg. では *pagawa?* の形がありそれは (為すよう命ぜられた・乞われたこと・もの) の意味であって、In. の p 系列の接頭辞でもってこの意味を表わすことは不可能である。例えば *pə-* を取り得る In. *pətaruh* (賭物, 担保=置かれたもの) は Tg. *patago?* と形態的に対応するが (*taruh*, *tago?* は **taruh* (置く) に由来する), Tg. は (仕舞う・しっかりと置くよう求められたもの) の意味になり、また In. *pəN-* による *pənaruh* (置く人, 供え場) に対し、Tg. *panago?* の形はあまり見られないけれども、(仕舞うために用いられるもの) のことになる。

このように個々の言語における *p 系列の機能には、その間に一致を見出し得ないほど異なっている場合も少なくない。しかしそれは *m 系列で見られた概念と基本的には平行するものであり、またその概念をもとにして各言語の p 系列の機能の展開があったのであったのであって、この点について再び個々の言語の機能を考察することにする。なお、前鼻音化現象の起こり方は **maN-* について各言語に示したのと等しく、原則的にはその *m-* を *p-* に変えるだけでよいから、特に必要のない限り改めてその説明をすることはしない。

1. Kw.: Kw. の *par-* は既に古形であってわずかに *parujar* (代弁者, 代理) が碑文に残るにすぎない。⁵⁸⁾ しかしこの *par-* は *ujar* (言葉, 音) に対して「持続的に所有する人」を表わしたこと、すなわち (言葉を持つもの) がその原意であったことは明らかである。しかしその *pa-*, *paN-* 形, *pojar* (<*pa-ujar*), *pagujar* についてはいずれも語基の意味 (言葉) と変りはな

く、その間の区別は見られない。pa-, paN-の区別は意味的に既に不明瞭な場合が多く、また文法書もこの間の区別について全く明らかにしていないが、その差は ma-, maN-と平行的に pa-は「語基の持つ性質・状態にその発話の時点においてなる、または、なっていること・もの」、paN-は「～にする・行なう・向かうこと・もの」であったと考えられる。上の pojar は〈音になること〉、paṇujar は〈音にすること〉が原意であるが、その本来の持つ機能は忘れられて、両者の意味は単に〈言葉〉として固定化して残されているのである。同様に, dāmak (贈物, 貰った) も padāmak : paṇdāmak (贈物=貰うもの: 遣るもの) のようになるし、また、その区別が明瞭に現われる場合もある。

Kawēkas ta mahārāja śāntanu prihati ri patinggal dewi Ganggā. 〈女神ガンガーの去ること (死) によって大王シャーントヌには悲哀が残された〉⁶⁰⁾

Oruk warṇṇa ni wāṇḍiranya kadi śoka makēkul i paninggal ing priya. 〈愛する人に去られたこと (残されたこと) によって悲しみを身にまとったかのように、その榕樹の姿は醜かった〉⁶⁰⁾

この二つの文において語基 tinggal (残る, 去る) から作られた pa-, paN-形にはそれぞれに直訳的に示した意味——特に後者は〈(愛する人が榕樹) 残す・後にすること〉とも——によって、その機能上の差を看取することができる。ただし次のような例においてもサンスクリット借用語 saṅgraha (貢ぐ) に対するそれぞれの形に意味の差を求めることは、一見困難である。

Malungguh ta sira ngkāna, humarēpakēn ikang sēkul, pinangan ira tikang sēkul, pasanggraha ning rākṣasa Baka. 〈彼はそこに座り、飯と向い合った。そして羅刹バカの貢物であるその飯は彼によって食われてしまった〉⁶¹⁾

Maswāgata ta sang Pulomā, maweh sarwaphala mwanṅ mūlaphala, pananggraha nireng tamuy. 〈プロマーは歓迎し、客への貢物としてありとあらゆる果物を供した〉⁶²⁾

しかしこの間にも pa-, paN- の機能上の差は存在し、詳しく見るならば、前者は〈(既に) バカが貢いでいる・貢がれた状態にあるもの〉のことであり、後者は〈(これから) プロマーが貢ぐもの〉のことであってそのような関係は意味の差が明確な patuku (買価) : panuku (持参金) (tuku (買う)), patamu (会合) : panamu (発見) (tamu (出会う)) においても認められる。

なお、paN- の「するもの」の「もの」が強調されて「道具」を意味する場合がある。これは Tg. で paN-, In. でも paN- によって示されインドネシア語派に属する言語に大体共通した現象である。その例、pamanah (飛道具) (panah (矢, 弓)), pamupuh (打道具) (pupuh (ハンマー)), panulak (引抜具) (tulak (そらす)), paglawad (面会のための道具=土産) (lawad (訪ねる)), panumbas (買うためのもの=身の代金) (tumbas (買う)) など。

このように Kw. では *p 系列が名詞的に機能しているけれども、しかし共通祖語において既に *m, *p 系列が動詞的、名詞的という具合に明確に区別されて働いていたのではなかった。その間は、ややもすれば曖昧となりがちであった。そのことは Kw. 以外の殆んど言語についていえるけれども、Kw. にもそのような傾向が残っている。それは特に否定辞 ndatan, tan, 仮定・条件の接続詞 yan, yar の直後に来る場合、また時に命令形においても、ma-, maN- は pa-,

paN- となって現われ、機能的には ma-, maN- と全く等しく、すなわち動詞的に用いられるのである。(In. の tanpa (=dagan tidak) 〈～なしに〉は Kw. の tan pa+語基 を異分析した形に由来している。)ここに現われる pa-, paN- は、*p 系列にあったかつての動詞的機能がそのような形式において残ったのであって共通祖語の痕跡を示すものである。ただし、その機能は ma-, maN- に応じてそれと等しく変化せしめられたのである。その例、

An tan panguinum amṛta, mangkana lwirku. 〈甘露 (=天酒) を飲みもしないのに、お前の状態はこうだ〉⁶³⁾ (panguinum は mapinum と等しい。)

Kunang yan hana mārga ni nghulun kawruhana yan pagawe wighnani tapa nira. 〈さてもし彼の隠者生活の妨げをするような方法が私に知られるならば〉⁶⁴⁾ (pagawe は magawe と等しい。)

Pamalaku ta ri kami kita, kami manganugrahe kita. 〈お前は私に乞え、私はお前に与えよう〉⁶⁵⁾

2. Jv. : Jv. の場合、事情は上に述べた Kw. と大体等しい。(*par->) par- は parandene 〈にもかかわらず〉のような語基にわずかに残されるのみであって、ande, ande?ne 〈そうではあるが〉という語も一方で存在する。要するに par- は Jv. で全く機能しない。(いうまでもないが pra- はサンスクリット起原の接頭辞であって、〈前〉を表わすために盛んに用いられる。prajanji 〈約束 (=前の同意)〉。)また、pa-, paN- についても文法書でこれを区別しているものは殆んどなく、時には全く同様に扱っている。ジャワ語文法では特に paN- 形のみを指して「純粹行為形」„Rimbag Krijawatjaka” と呼び、「語基 (語根) の性質・状態にする方法・行為・者・道具」の名詞を作ると説明するが、pa-, paN- の機能上の内的差違を指摘しているものはない。⁶⁶⁾しかし Kw. にも見られたようなその間の相違は、やはり明瞭に認められるのであって、pa- は「なる・なっていること・もの」、paN- は「すること・もの」の区別が Jv. にも存在しているのである。なお、Jv. の p 系列は m 系列と異って前鼻音化現象形の ma- に当たる pa- の部分を落とさない。例えば、patuku 〈買価=買うことになっているもの〉: panuku 〈買物=買うこと〉のように。しかし pa-tuku の形は、現在、最早稀にしか現われず、panuku が両方の意味を兼ねてきている。このように paN- 形が旺盛に現われるのに反して、pa- 形は幾分固定化した語に残るのみである。しかしそのような語もまた多い。(文法書が pa- 形に特に触れない理由もここにある。)その他の例、pačino 〈シナ戦争=シナ人と(戦争に)なったこと、1741—1743年のジャワ人と中国人との間の戦争〉, pagəriṅ 〈流行病〉(gəriṅ 〈病んだ〉), palayu 〈逃走〉(layu 〈走る〉), pojar 〈云うこと〉(ujar 〈云う〉), pakon 〈命令〉(kon 〈命ずる〉), padaṅ 〈飯焚人〉(adaṅ, daṅ 〈飯を焚く〉), paṅon 〈牧夫〉(aṅon 〈牧養する〉), pituṅ 〈計算、勘定〉(ituṅ 〈数える〉)。これらに対して paN- 形は次のようになる。paṅapuṅ 〈攻囲〉(kəpuṅ 〈囲む〉), paṅetan 〈東方にあるもののすべて=東に向いているもの〉(wetan 〈東〉), panulis 〈書くこと、書法〉(tulis 〈書く〉), papiriṅ 〈随員〉(iriṅ 〈従う〉), paggaḍe 〈長=先頭・偉大にしたもの〉(gaḍe 〈大きい〉), pambarəp 〈長子〉(barəp 〈最初に生れた〉), pan'ukur 〈剃刀〉(čukur 〈剃る〉), paṅango 〈衣類〉(aṅgo 〈用いる〉), paṅroso

〈感覚〉(roso 〈感じる〉), pan'uwun 〈要求〉(suwun 〈求める〉) など。次に Surakarta (Solo) 王室の Paku Buwono IV (1788—1820) の文章を掲げておく。⁶⁷⁾

Sanadjan ta nora mèlu, pasti wruh solah ing maling, kaja mangkono sabarang, panggawe ala puniki, sok wruha nuli bisa, iku panuntun ing éblis. 〈たとえ実際にやらなくとも、盗みの行為はきつとあらわになるもので、誰がしてもそうである。そのような悪い行為 (= すること) はすぐ知れてしまうもので、それは悪魔の導き (= 導くこと, tuntun 〈導く〉) というべきか)

なお、痕跡的に動詞形を示すものとして p 系列が残っていることがある。それは命令形および若干の使役形の語に見られるが⁶⁸⁾, Kw. のその用法を更に引続き保持しているのである。patəḍo 〈渡す, 贈る〉(təḍo 〈食べる〉), paro 〈割る〉(ro, loro 〈二〉), potap 〈金を貸す〉(utap 〈負債〉), palugo 〈行け〉, paturu 〈眠れ〉, pegət 〈注意せよ〉。

以上のように pa- は最早充分に機能せず, paN- との対立を示す語も少ないけれども, 名詞化の接尾辞 -an が加わった形式, すなわち pa-an, paN-an (ジャワ語文法では前者を「純粹手段形」„Rimbag Dajawatjaka”, 後者を「純粹理由形」„Rimbag Karanawatjaka” と称する) の対立例は多い。この事情は In. においても同様である。pagawean 〈仕事, 職業〉・paggawean 〈仕事〉(gawe 〈作る, 行なう〉), palinḍugan 〈避難〉: paglinḍugan 〈避難所〉(linḍug 〈隠れる〉), padunungan 〈土地〉: pandunungan 〈領主〉(dunug 〈場所, 位置〉), pakəčapan 〈発音, 表現〉: pagəčapan 〈印刷所〉(kəčap 〈舌打ち, 言葉〉) など。この間の区別を明瞭にしている文法書はやはりないけれども⁶⁹⁾, その本来の意味は pa-, paN- の機能が同じく関与していることは明らかであって, ただそれに -an が加わることによって派生的な意味が更に発生したのである。ただし -an 形の説明は, 機会を改めて説くことにしたい。

3. Tg.: Tg. の p 系列の説明にはいる前に, 先の m 系列で示した putol によってその pa-, paN-, pag- 形の例を掲げる。

Ang manga tubo ng ito ay paputol sa akin ni Pedro. 〈この甘蔗はペドロによって私において切るように命じられたものである (= この甘蔗はペドロが私に切るよう命じたもの)〉

Pamutol nang buhok ang gunting na ito. 〈この鋏は髪について (に關して) 刈る (切る) ために用いられるものである (= この鋏は髪を刈るためのもの)〉

Ang pagputol nang buhok ay maluwat matutuhan. 〈髪について (に關して) 刈る (切る) ことは学ぶに期間がいる (= 散髪には年期がかかる)〉⁷⁰⁾

p 系列の基本的機能は, 既に説明した m 系列の機能によっている。ただし p 系列の場合は, 他の言語と同様にすべて名詞化されるということである。まず, この p 系列の p- そのものの機能について E. Wolfenden が「行為の抽象または本質的狀態」を示すといっているのは正しいであろう。⁷¹⁾ pa- は ma- に見られた受動的機能が更に強調せられて, 「語基の示す行為がなされるようにさせられた・命じられた・求められたこと・もの」を表わすのが原意である。⁷²⁾ pagawa? 〈詠

＝作られるよう命じられたもの), pautag (信用貸し＝借金するよう求められたもの) (utag (借金)), pagalan (名前＝呼ぶよう求められたもの) (alan (呼ぶこと)), pataba? (肥料＝肥えさせるもの) (taba? (肥え)), paliwanag (説明＝明快にさせられたもの) (liwanag (明快)), pabili (購入依頼品＝買われるよう求められたもの) (bili (買うこと)), pabuya (心付＝満足させるもの) (buya (満足))など。またアクセントのついた má- があったように、アクセントのつく pá- があるが、これは má- とは異なって「行為の増大・強烈」を表わす。

Páaga ka nang pagparito. (ここへ来ることについてお前は早くしろ(本当に早くすること))⁷⁹⁾
(aga (早さ, paaga (早場米＝早くとれるようさせられた米) 参照)

このように名詞化の機能が一般的であるにもかかわらず、名詞として固定するそれ以前の段階に留まって形容詞・副詞的に「～を供給されて・与えられて」の意味で用いられることがある、pakain (食物を給されて), padamit (衣類を与えられて), patubig (水を与えられて)⁷⁹⁾ のように。しかしこの本来の意味もやはり「～するようにさせられて」であって、それが名詞になりきらなかっただけのことであり、このような共通祖語における原機能の不安定性の痕跡は、Kw., Jv. の pa-, paN- にも見られた。なお、Tg. pa- が次に述べる paN- と等しい機能、すなわち「道具」を表わしたことを示す例も既に語基となった語に残っている。共通祖語の不安定な時期にでき上がったものであろう。ただし、pa- と paN- との間は不連続的な断絶があるのではない。「～するようにさせられたもの」は、また「道具」の意味にも容易になり得るからである。pabago? (香水) (bago? (芳香)), patalim (刃) (talim (鋭さ)), のように pa- がまだ分離し得るもののほか、palaso? (矢), palataw (手斧), patibog (わな), patadyog (スカート), pako? (爪) では pa- が既に合成されてしまっている。この現象は In. にも認められる。

次に、paN- については maN- の機能と平行的に、「語基の意味する行為が繰返し・反復的になされるために用いられるもの」、すなわち「道具」「～ためのもの」を表わすことになる。⁷⁹⁾ panulat, pansulat (筆記具＝書くために用いられる道具) (sulat (書くこと, 手紙)), pandinig (聴覚器官＝聞くために用いられるもの) (dinig (聞く)), pag?ahit (剃刀) (ahit (剃る)), pandiwa? (動詞) (diwa? (感覚, 概念)), pag?uri? (形容詞) (uri? (種類)), paghalip (代名詞) (halip (代用の)), pambansa (国民のためのもの) (bansa (国民)), ただし, ang pambansang awit ng Pilipinas (フィリピンの国家の歌(＝国歌))におけるように形容詞的に〈国家の〉ともとれる。そのようにのみ記している辞書もある) など。

pag- も mag- に見られた「包括的行為」を抽象名詞化して、いわば「動名詞」「verbal noun」的に機能させる。その意味するところは「～すること」「～する行為、～の仕方」ということである。またそこには「持続性」がある。⁷⁹⁾ 更に動詞の -um- に対してそれを名詞化する場合には、語基(語根)は語頭音重複されることが文法的に要請される。これは -um- の機能そのものがより行為の連続性・持続性を示すためであると考えられる。その例, pagkain (食事), pag-alis (出発＝去ること), pagdatig (到着＝着くこと), pagtulog (援助＝助けること), pagbasa (読書＝

読むこと), pagsulat (書記=書くこと, magsulat), pagsusulat (書き続けること, sumulat), pag?ísip (熟慮, mag?ísip), pag?íisip (工夫, 思考力, umísip) など。なお, putol に対する例。

Pagpuputol ni Hwan nang buho ay pumaroon ka t tulungan mo sya. (竹についてジョンの切り続けている(ことの)時 (=ジョンが竹を切り続けている時), お前はそこへ行け, してお前によって彼が助かれ (=お前は彼を助けてやれ))⁷⁷⁾

4. In. : In. の p 系列, pə-, pəN-, pər- についてはこの接頭辞のみによって対立を示す例はさほど多くない。しかしそれでも次のような例がある。pətaruh (賭物, 担保) : pənaruh (置く人, 供え場) (taruh (置く)), pəsuruh (使者=命ぜられた人) : pən'uruh (命令者) (suruh (命ずる)), pəjabat (事務所) : pənjabat (勤務者, 役人) (jabat (握る)), pətinju (拳闘家) : pəninju (人を殴る人) (tinju (拳)), pəkasih (媚薬) : pəgasih (慈愛家, 憐れみ深い) (kasih (愛)), pəlihat (慧眼) : pəlihat (視官) (lihat (見る)), pəkirim (到来物) : pəgirim (送り人) (kirim (送る)), pədagaḡ (商人) : pəndagaḡ (天秤棒) (ただし後者はミナンカバウ語からの借用?), dagaḡ (商う)), また既に区別のない pərusak : pəgrusak (破壊者) (rusak (壊す)), pəlipur : pəlipur (慰安者, 慰安品) (lipur (慰める)), pətənuḡ : pənənuḡ (占師) (tənuḡ (占う)), pəsirih : pən'irih (シレー嗜好者) など。しかしこれらの形に対して pər- 形は存在しないのであって, pər- もわずかに, pətunjuk (指示) : pənunjuk (指示者, 指示用具) : pərtunjuk (指示) (tunjuk (示す)), pəndua (予備品) : pərdua (二分の一) (dua (二)), また既に区別なく pəjuag : pərjuag (闘士) (juag (戦う)) のように用いられるが, 要するに対立的にその機能を示す例は, 限られている。先に In. の mə- は最早その機能が停止して痕跡的にその形が残るのみであり, In. における mə- の機能は明らかではないことを述べた。しかし, この pə- 形についてはまだその機能を推度することができるのであり, それは「語基の状態・性質を名詞化すること」と同時にそれと関連的に Kw., Tg. にも見られたように「受動的機能を表わすことから名詞へと固定化させること」であった。(R. A. Kern は *pa- を In., Kw. apa, Jv. ɔpɔ (何) の -pa, -pɔ と関係があると考えている。^{77-a)} 上例の (賭物=置かれたもの), (使者=命ぜられた者), (指示=指示されたこと), (事務所=務められるもの), (予備品=二個にされるもの) などではその内的意味が明らかであり, また, (拳闘家) も (殴られる人) がその原意であった。しかし pə- のこのような機能は「～する人・もの=道具」を表わす pəN- とその機能上の差違が曖昧になりがちである。それは Tg. の pa-, pəN- の間にも見られたことである。現在, In. において pə- の使用が限定的となり pəN- によって取替えられ, また, その間の区別が存在しなくなりつつあるのは, pəN- が pə- の機能をも包含し始めたからである。pə- のそのような機能は次のような語基として残る語の (*pa->) pa- (>pə-) が「道具」を示していることから明らかである。pagar (垣), pačul (鋏), pahat (鑿), patil (手斧), paraḡ (鉞), paku (釘) (Tg. pako? (爪), paku, pako? の -ku, -ko? は In. kuku (瓜) : Tg. kuko (指爪), In. buku (節) : Tg. buko (節), In. kaku (硬直した), bəku (凝固した), suku (脚), siku (肘) の -ku, -ko と同語根であろう)。また, 次の

例も母音で始まる語根についた *pa- であって後に示す関連語とともに、現在、それぞれが語基として、存在するのみである。palu 〈打撃〉(alu 〈杵〉), pijak 〈踏む〉(injak 〈踏む〉, 前鼻音化現象形), pulang 〈帰る〉(ulang 〈反復〉), paliq 〈そらす〉(aliq 〈隠す〉), pulih 〈回復する〉(Jv. ulih 〈帰る〉), paŋkat 〈地位, 階級〉(aŋkat 〈持上げる〉, 前鼻音化現象形) など。この中で動詞的意味を持つものもあるが、共通祖語における動詞・名詞の区別が明確でなかった機能の痕跡であると考えられる。

pəN- は他の言語と同様に「～する人, ～するもの＝道具」を表わすけれども, In. の pəN- の機能には Kw., Jv. のような抽象的に「～すること」を作る機能は最早ない。この点で pəN- の機能は Tg. paN- に比べてもはなはだしく具体的で, 抽象的名詞を作ることはない。(ただし, pən'akit 〈病〉[sakit 〈病んだ〉] のようなわずかの例外はある。) pənulis 〈著者＝書く人〉(tulis 〈書く〉), pəphapus 〈消す物〉(hapus 〈消す〉), pəpajar 〈教師〉(ajar 〈教える〉), pəndidik 〈教育者〉(didik 〈教育する〉), pəmbača 〈読者〉(bača 〈読む〉), pəemukul 〈槌〉(pukul 〈打つ〉), pəngali 〈鍬〉(gali 〈掘る〉), pənčahar 〈下剤〉(čahar 〈下痢〉), pəmbəsar 〈高官〉(bəsar 〈大きい〉), また In. では破裂・破擦音, 母音が語基(語根)の語頭にある場合のみ, 前鼻音化現象を起こすから, それ以外の音については pə- のみによってこの現象が起こらない形で上記の意味を表わすことになる(先の pəglihat は稀な例外的形, ただしより古い段階の前鼻音化現象の痕跡であろう。) pəmain 〈演者〉(main 〈演ずる〉), pərapok 〈強盗〉(rapok 〈奪う〉), pəlayan 〈給士〉(layan 〈仕える〉), pən'an'i 〈歌手〉(n'an'i 〈歌う〉), このように pəN-, pə- の現われ方は補い合う分布をしていたことにも, pən- が pə- の機能を吸収した一つの理由があらう。なお, Kw., Jv., Tg. に存在した p 系列における動詞・形容詞的機能の残存は In. においても認められる。それは A. A. Fokker によって「目的連結」 „finale relatief” と名づけられた pə-, pəN- である。

Uang itu dipergunakan penolong sahabatnja. 〈その金は彼の友人を援助するために用いるものだ)⁷⁸⁾ (tolog 〈助ける〉)

ここに現われた pənolog は名詞的な〈援助者, 援助品〉を意味してはおらず, 訳文に掲げたような意味になる。つまりそれは Kw. の pa-, paN- が ma-, maN- と等しい機能を帯びることがあったように, この pəN- は məN- の機能を持つ (mənolog 〈援助する〉)。しかしそれのみではない。「における, ために (untuk)」を表わす機能もまたそこに含まれているのである。ここには Tg. の pa- が「与えられて」を表わしたのと, いずれも補語的に用いられる点において共通した趣がある。ただし In. においてはこのような補助的機能の弱まりがあり, 冗語法的に untuk を更につけたして用いられることもある。

Sawah disana tidak begitu luas untuk pengisi perut penduduknja. 〈その地域の水田は住民の腹を満たすためにそれほど広くない)⁷⁹⁾ (isi 〈内容〉, pəngisi 〈装填物〉)

このような pə-, pəN- の機能に言及する文法書は殆んどないけれども⁸⁰⁾, pə-, pəN- が「～する人, ～するもの＝道具」を表わすに至ったのも, 発生的には上に述べたように「における, する

ための」に対して更に外顯的に、また内在的に「人」(orag), 「道具」(alat) を期待する気持があったことに由来している。(alat) pəŋgali (鍬=掘るための道具), (alat) pəŋlihat (視官=見るための器官), (obat) pəmerah (紅色染料=赤くするための薬品) (merah (赤い)), (orag) pənċemas (厭世家=世を厭う者) (ċemas (悲観的な)), (orag) pən'abar (忍耐家) (sabar (辛抱強い)), (orag) pənulis (著者=書く(ことにおける)人)。これらの中でも pən'abar は形容詞的に用いられることもあり、更に, pə lupa (忘れん棒, 忘れっぽい) のほか,

Pegawai jang pemarah itu sedang marah². (その怒りっぽい事務員はまさに立腹している最中だ)⁸¹⁾

の pəmarah はここで形容詞的であると同時に名詞的に〈怒りん棒〉としても用いられる。

pər- については先に示した pəN- と対立する語, pənunjuk : pərtunjuk, pəndua : pərdua のほか、既に実際の使用において差違が不明瞭になりつつある pəmburu (狩人(趣味として)) : pərburu (狩人(職業として)) (buru (狩る)), pənənun (〈丁度、今〉織っている人) : pərtunun (〈いつも〉織っている人) (tənun (織る))⁸²⁾ などの例がある。pəN- は単に「語基の行為をする・行なう人」であったのに対し, pər- は「語基の行為に持続的・継続的に所属する・携わる・関係すること・人」を表示する機能がかった。そのような区別は上の例においてもまだ認めることができる。この pər-, pəN- の機能は bər- (mər-), mən- とも平行的である。ゆえに上の pəmburu : pərburu, pənənun : pərtunun もそれぞれ məmburu (狩る=狩りを行なう) : bərburu (狩る=狩りに携わる), mənənun (織る=織ることを行なう) : bərtənun (織る=織ることに従事する) の動詞形が名詞化されたとする見方が一般的にとられている。⁸³⁾ これはいわゆる「変換的」“transformational” な考え方である。確かにそのような相関的現象が存在することもあるが、それは事実のすべてではない。なぜならそのような「変換的」説明による人は、pə- 形の説明が全くできない。In. では mə- が最早活用されないからである。ゆえにこの pə- 形の説明のために pə- を pər- の単なる形態音韻論的な異形とする考えが大部分を占めるのは、bə-, bər- の場合と全く同様である(II., 註16参照)。⁸⁴⁾ 例えば pədagag (商人), pətani (農夫) に対してその動詞形は bərdagag (商う), bərtani (農業) であるから、対立的に pər-, bər- を考える人は、*pədagag, *pərtani という形はないから、その説明に窮するのである。⁸⁵⁾ 要するに m, p, b 各系列の接頭辞はそれぞれ独自に語基(語根)と結合して機能していたからであって、一つの語基(語根)に対して同じ傾向が行なわれることももちろん多かったけれども—— pəmburu, məmburu のように——、個々別々の接頭辞しかとらなかった場合も—— *pa-dagag > pədagag, *bar-dagag > bərdagag のように——またあったのである。個々の接頭辞は互に独立であった。一つの語基(語根)に対する接頭辞のつき方は、全く完璧な体系性のもとに行なわれたのではなかった。ここにこれまでの文法家のひたすらに体系性を求めようとするあまり説明のできなかった現象の存在する理由がある。

なお, pər- にも動詞的機能があるように述べる文法書は多い。しかしその pər- は普通の状態

では məN- を更につけ加えた mǎmpər- (*məmə-とはならない。məN- と pər- との結合は既に古く、共通祖語的な前鼻音化現象の結合方式が残っているのである) の形で存在する。məN- のみよりも一層強制的な機能を持つ他動詞および使役形を作る。この mǎmpər- は命令形、および「二重主語文」において mǎmpər- の直接の主語(=第Ⅱ主語)のほかに第Ⅰ主語がある時に⁸⁰⁾、その məm- を落とすのである。しかしこの後者は、接頭辞が mə- のみの場合でもその mə- を落として語基(語根)または語基(語根)+接尾辞を動詞としてしまうので、それに類推して mǎmpər- の məm- を落としたまでのことであり、この場合の pər- には動詞の機能は全くない。例えば、Dia melihat orang itu. 〈彼はその人を眺める〉(lihat 〈見る〉, -kan は他動詞化の接尾辞)は二重主語文において Orang itu dia melihat (dilihatkan). 〈その人は彼が眺める〉となり mə- は落とされてしまう。これに類推して Dia memperlihatkan kepandaianja. 〈彼は才能を見せる・見せびらかす〉は, Kepandaianja dia perlihatkan (diperlihatkan). 〈才能は彼が見せる・見せびらかす〉となってここに pər- が現われる。要するに「二重主語文」の場合、第Ⅱ主語と語基(語根)との結びつきが固くその間に接頭辞の介入を許さないからである。また、前者の場合、命令形についても事情は全く同様であって mə- のみの場合はその mə- を落とすから, lihatkan(lah) 〈眺めよ, -lah は強調の接尾辞で、なくてもよい〉となるのに対して Perlihatkan(lah) 〈見せよ〉となるまでのことであって pər- がそのようにいわば動詞的に用いられるのは、必ず mǎmpər- の形がその背後に予想されなければならない、また、命令形および「二重主語文」という統辞論の範囲内でそのようなことになるまでのことである。mǎmpər- の発生はその前鼻音化現象形の現われ方からしても既に古く、またその時には pər- に動詞的機能があって一層強制的な mǎmpər- の形ができあがったことは充分に考えられる。しかし、現在の In. では上記の統辞論の限界を越えて pər- が動詞的に用いられることは決してない。このような pər- に対してあたかもそれがいわゆる「不定詞」的に動詞の機能があるように説く文法書が多いのは、深い誤解に基づくものといわざるを得ない。⁸¹⁾ 現在, In. の pər- には動詞の機能は全くないことをここ再確認しておきたい。

Jv. で pa-an, paN-an の対立例は多くあったように、In. でも -an を伴って pə-an, pəN-an, pər-an で対立する語は豊富である。pəkuburan 〈埋葬地〉: pəguburan 〈埋葬〉(kubur 〈墓〉, *pərkuburan を欠く), pəkərjaan 〈仕事, 事業〉: pəgərjaan 〈執行, 挙行〉(kərja 〈仕事〉, *pərkərjaan を欠く), pəjiraan 〈推測〉: pəkiraan 〈考慮, 計算〉(kira 〈考え〉, *pəkiraan を欠く), pənahanan 〈逮捕〉: pətahanan 〈防衛〉(tahan 〈耐える〉, *pətahanan を欠く), pəgairan 〈灌溉〉: pəairan 〈領海〉(air 〈水〉, *pəairan を欠く), pən'atuan 〈合併〉: pərsatuan 〈連盟〉(satu 〈一〉, *pərsatuan を欠く), pəmbuatan 〈製造〉: pərbuatan 〈行為〉(buat 〈為す〉, *pəmbuatan を欠く) など。⁸²⁾ いずれも三形による完全な対応は示さないけれども、語基(語根)に対する各接辞の機能の仕方は、以上に述べたように pə- は「語基の性質・状態を(受動的に)名詞化」し、pəN- は「語基についての行為を名詞化」、pər- は「語基の継続的保持・所有を名詞化」する点において、た

とえ -an があるにせよ、その差違を看取することができる。このような接辞法を利用して新たに名詞形を作り出す文人もいる。

Proses pendalaman djiwa tidak mulai dengan datangnja Djepang, tetapi dipertjepat. (精神の深遠化(=深めゆくこと)の過程は日本がやって来てから始まったのではなかった。しかしより一層早められた) (dalam <深い, 内ら>)

Angkatan 45 ~ mendapat pendalaman sampai keintipati soal, terlepas dari pandangan hidup konvensional. (45年組文学者群は～因襲的な人生観から解放されてその深遠化は問題の核心に触れるに至った)⁸⁹⁾

また Jv. にも見られたサンスクリット起原の接頭辞 pra- は In. で pār- となって同じくサンスクリット借用語に伴って現われるが、これは *par- と関係がないことはいうまでもない。pərtama <第一の>, pərkara <出来事>, pərtiwi 地球>, pərwira <勇ましい> など。

5. 残りの言語についても Sn. ではサンスクリット由来の per- が多くあるほか、pərkara <出来事>, pərmata <宝石>, pār- が単独で現われるのは数詞の分数を示す場合に限られる。pərdua <二分の一, In. pərdua 参照>, pərtilu <三分の一>。ただし, pār-an 形では In. の pār-an とその機能を等しくして現われる。Sn. pərsobatan : In. pərsahabatan <友好> (sobat <朋友>)。ゆえに pār- の pa-, paN- との対立機能は非常に低い。また, pa- は In. の bər- と同機能を持つ (II. 参照) 一方において, In. pə- のほか pəN- に相応する機能すら持っているのである。pagawe <労働者> : In. pəgawai <事務員> (gawe <仕事>), padagaŋ <商人> : In. pədagagaŋ (dagagaŋ <商う>), paburu <狩人> : In. pəmburu (Sn. に *pərburu という語はない, In. pərburu <狩人> (職業として) 参照), pamuk (<pa-amuk> <暴徒> : In. pəgamuk (amuk <気が狂れること>))。しかし paN- はまた In. pəN- と同機能的な一致があり「～する人・もの」をも表わす, pagbantu <協力者> : In. pəmbantu (bantu <助ける>), panuluŋ <援助者> : pənolog <tuluŋ <助ける>), panʏŋgʏl <槌> (tʏŋgʏl <打つ>, In. pəmuluk), panʏŋkal <挺子> (suŋkal <持上げる>, In. pəgumpil, In. suŋkal <犁>), panʏku <脚を持つもの=ジャワ文字のu, ジャワ文字では -u は各子音字の下に足の形をした文字をつけて示されるから> (suku <足>, In. suku)。ところが paN- の表わす機能はそれのみでなく, In. pəN-an, pār-an と等しく, 抽象的名詞を作ることも多い。pananʏa <質問> : In. pətanʏaan (tanʏa <尋ねる>), Sn. patanʏa <尋ね合う> : In. bətanʏa (-tanʏa)-an 参照), pamere <贈物, 寄贈> : In. pəmbərian (bere <与える>), pagirim <送付> : In. pəgiriman (kirim <送る>), pagawe <仕事> (gawe <仕事>, In. pəkərjaan), pagbakti <献上> (bakti <忠誠>, In. pərsəmbahan) など。

以上のように Sn. では pa-, paN- は機能の上で相交錯している点が多く, Jv. の場合と同様に pa-, paN- を一つにまとめて説明している文法書すらある。⁹⁰⁾ またそれを区別しているものでも両者間の差違は明らかに説き尽されてはいない。⁹¹⁾ しかし paN- がその本質的な機能として「～する人・もの=道具」の意味があるのに反して, pa- が paN- と根本的に異なる点は, pa- は

Tg. の pa- にも見られたように動詞的機能を持つことであって、それは In. の bər- と等しい場合のほか、patiŋgal <離れる> (tiŋgal <残る>), In. bərpisah. なお、Sn. paniŋgal <逝去> 参照), 受動的機能をも帯びて (Ⅲ. 3. Tg. の ma- をも参照) <離された> ともなる。そのような受動性から名詞的な「なされた人・もの」が導びかれ、これと paN- によって示される機能とが Sn. においては特に著しく混淆し現在の様相を呈するに至ったものと考えられる。

次に、Gj. でも Sn. のように pə-(pu-), pəN-, pər- 間の混淆が見られるが (特に pə-(pu-) と pər- の間に著しい), しかし原則的な各接頭辞の機能の仕方は次のようになる。pər- は「語基の性質を完全な程度に所有すること・特質となっていること」を示し形容詞的に用いられる (この完全性において mə- とは異なる, Ⅲ. 5. 参照)。pə-(pu-) は他動詞形, または「継続的な状態」を示す名詞となる。pəN- は他の殆んどの言語と同様に「～する人・もの」を示す。Pəket pədiŋ asu oya. <その犬は全く噛む癖がある・噛み症だ> (pər- を持つ語は, pədiŋ <全く, 本当に> を更に強調的に添えることが多い) : Pəket awal i awahe sabi, görö iŋəgale. <(彼は) 口にバナナをじっと含み (噛み) 続けていて, 咀嚼しなかった> : Pəget n asu oya. <その犬は (についていえば) 噛み犬 (=噛むもの) だ> (ket <噛む>).⁹²⁾ その他, pərtənah <詳しく知らされる=伝言を待つ> : pərtənah <指令> : pənənah (pərtənah) <使い=伝言を持つもの> (tənah <伝言, 指令>), pərusuh <手癖の悪い> : puusuh(-usuh) <盗み続ける> (usuh <盗む>) など。Dj. では *paɾ- に由来する形は最早存在せず, その対立は pa-, paN- のみによっている。大体において pa- は「語基の状態」を, paN- は「語基の行為 (ただし, 好意的・繰返しの意味がある)」を動詞・形容詞的に表わす。pabans <結婚した> : pambans <幾度も結婚する> (bans <夫>), pagapi <近付く, 来る> : paŋgapi <近付ける> (gapi <近い>), その他, pambusau <他人を酔わせたがる> (busau <酔った>), pandagaŋ <商売好きの, 商いにたけた>, ただし, pambujaŋ <年頃の青年> (bujaŋ <年頃の>), panəŋa <贈物> (təŋa <与えられること>), panəŋa は <しばしば与える> とも), pabans <結婚すること, 結婚> のように名詞的にもなる。Br. は m 系列の mo-, me-, ma- およびその前鼻音化現象形と対立して po-, pe-, pa- およびその前鼻音化形があり, それらはいずれも名詞 (特に「動詞状名詞」 „verbaalsubstantief, nomina verbalia”) を作る。poapu <調理の方法・時・場所, 煮沸> (apu <火>), pekaju <薪取りの方法・時・場所> (kaju <木, 薪>), pasogka <を命ずる方法・時・場所> (sogka <命令>), pawawa <を持ってくる方法・時・場所> (wawa <持ってくる>) : ponŋogka <命令の仕方・時・場所> (sogka <命令>), pombawa <食物の運び方・時・場所, 運ばれた食物> (wawa <持ってくる>), pembasa <髪を洗うもの=レモンの実> (wasa <洗う>), panjama <触れるもの=手> (jama <触れる>) など。⁹³⁾ このように m 系列に見られた機能は p 系列にも反映しており, この現象を起こさない形が大体において「行為の結果・状態」を示すのに反して, 前鼻音化形は「行為の目的」に重きを置く点で相違があり, pombawa, pembasa などはそのような p- の機能に頼るのみで目的語すら外顯的には現わされていない。Bt. は pa-, paN-, par- の区別をしている。ただし, そのすべてが「～する人・もの」を表わすことができ, paburu

〈狩人〉(buru 〈狩る〉); panakko 〈盗人〉(takko 〈盗む〉), panakit 〈腸の蟲=病を起こすもの〉(sakit 〈病んだ〉), papordag 〈播種者〉(ordag 〈小スコップ〉); parmodat 〈阿片吸飲者〉(modat 〈阿片〉), parboniaga 〈商人〉(boniaga 〈商う〉), この点では三者間の機能に相違はない。また, pa-, paN-はいずれも行為を抽象的に名詞化する点においても共通するが, 元来は前者が「状態」を, 後者は「行為」を示すことにあったと考えられる, pauli 〈修繕=良くなること〉(uli 〈良い〉), pam-buat 〈採取=取ること〉(buat 〈取る〉)。par- は Sn. と同様に数詞の分数を示す, (asa da-) pardua 〈二分の一〉。ただし, pa- は動詞的に機能することが多く, それは自動詞的にも他動詞的にもなる, padua 〈二人とも〉(dua 〈二〉), pajuppa 〈出会う〉, pasolsol 〈咎め会う〉, papande 〈働かせる=労働者にする〉(pande 〈労働者〉), pauli 〈修繕する, 飾る=良くする〉(uli 〈良い〉), この場合, 特に他動詞化の接尾辞 -hon をつけて paulihon として), padao 〈遠ざける〉(dao 〈遠い〉) など。⁵⁴⁾

V. *βα- の再構成

以上に述べてきたように *m, *p, *b の各系列の接頭辞は, それぞれの言語において完全にまた不完全に, 互いの言語間においてその機能を等しくまた幾許かの相違を持って, 保たれていた。言語によってはこれらの接頭辞を基本的なものとして更に他の接頭辞と二次的な複合形を作り出しているものもある。このような接頭辞については各言語間の機能のずれが更に大きくなり比較の作業にも困難を来す場合が多い。本稿では基本形のみを当面の問題とした所以である。さて, *m, *p, *b 各系列のそれぞれ三個の接頭辞は, 以上に行なってきた各言語の考察によっても明らかなように各々が独自の機能を持っていたと考えなければならない。しかしこの点についてこれまで少なくとも比較言語学的にこれらの接頭辞を問題とした人々によっても正しく認識されていたとはいえない。R. A. Kern, C. A. Mees はその立論の過程は別として, 結果的には正しく *m, *p, *b の各再構形を考えた人であったが (註3参照), R. Brandstetter は, m, p, b各系列に現われる -aN の -N, -ar の -r を「能動形形成素」「active formatives」とし, 起原的には冠詞であったとする。しかし彼によれば ma- も「能動形形成素」, pa- は「使役形形成素」, ba- は「自動詞形形成素」であるからそのような -N, -r がついた形を説明するために, 意味・機能に変化なし, あるいは「同化」「assimilation」によって生じたともいうのであって⁵⁵⁾, それぞれの機能の充分な考察には至っていない。B. Д. Аракин は前鼻音化現象形を起こす形・起こさない形の機能的差違すら知らないようであり, また Tg. についても pag-, mag-をさえその前鼻音化形 paN-, maN- と同様に扱っていて⁵⁶⁾, 問題にならない。また A. Teeuw は Kw. と古バリ語との比較によって一応 m 系列についての三個の再構形を考えるに至っているが, その機能にまで言及するものではなく, また他の系列についての考察も不充分である。⁵⁷⁾

さてここに諸言語の比較から *ma-, *maN-, *mar- ; *pa-, *paN-, paɾ- ; *ba-, baN-, *baɾ- の各接頭辞について次のような機能が明らかになった。まずそれぞれに共通して現われる *-a, *-aN, *-ar にはほぼ等しい機能が認められることである。すなわち *-a は「語根の性質・状態になるこ

と」であり、また、そうなることは「受動的に外的な力によって語根の性質・状態にさせられること」をも意味した。特に後者の機能は「必然的にそうなるという可能性」をも示すことになった。要するに*-aには話者の積極的な行為は関係しない。これに対して*-aNは、話者の積極的行為の参与を表わすものである。それは「語根の性質・状態へ向かう行為をなし、また、行なう」意味を持っていた。そのような行為が反復的に行なわれることによって、それが「行為者の特性・属性」ともなるのが一般であった。*-arは「語根の性質・状態を所持すること・に携わること・と関係すること」を意味し、それはまた当然、「持続性・継続性・複数性」の意味をも同時に帯びることになる。しかし*-arはその意味において、「なること」を意味する*-aがそれに代置することが多く、多くの言語において*-arはその使用を縮小され、痕跡的にしかその形を残さない。それは Kw. においてすらそうであった。それぞれの機能は、簡単にいうと *-a が「状态的」、*-aN が「行為的」、*-ar が「所有的」であった。いま仮に*-a, *-aN, *-arという部分を切出して説明を行なったけれども、その前の部分の *m-, *p-, *b- のみにまた独立の機能があったということではない。もしそうであるならば、それらの各子音の機能は明確に他と区別されなければならないから、諸言語に見られたように m, p, b 各系列間の使用上の交錯・混淆はあり得なかったはずである。ただし後次的に多数の接頭辞複合形を発達せしめたフィリピンの諸言語において、例えば Tg. ではこれまで扱ってきた m 系列は、「未始動形」または“mode”形と称され、これを基本形として m のみを n と交替させて「始動形」を作るような、いわゆる動詞の“aspect”を発達させている⁹⁸⁾、また、イロカノ語でも m 系列の ma-, maN- に対して ag- (Tg. の mag- と機能は等しい)であり mag- とならないことは⁹⁹⁾、この語頭の子音の部分の自由脱着させたことを物語るけれども、これはマライ・ポリネシア諸語ではあくまで二次的な発達であって、共通祖語には“aspect”はおろか“tense”の発生すらもまだ見られなかった。要するに *-a, *-aN, *-ar はそれぞれ *m-, *p-, *b- を伴った形で存在し、機能していたのである。そして大体において *m 系列は動詞的に（特に他動詞的に）、*p 系列は名詞的に、*b 系列も動詞的に（特に自動詞的・形容詞的に）上に述べたそれぞれの意味を働かせる接頭辞であった。しかしこれはあくまで一般的傾向であって各系列間の機能の差違は明確に境界を設けることができるほど他と対立し、区別されていたのではない。それは各言語において見られたように一個の接頭辞が動詞的にも名詞的にも用いられ、また、b 系列の接頭辞を保持する言語は少なく、たとえその系列を持っていたとしてもその機能の多様性、逆に不安定性・中間性を示すことによって充分に知ることができる。

*m, *p, *b 各系列間の機能がそのように完全に分化しておらず、互いに何らかの関連性を持っていることは、共通祖語の更に古い段階においてこれら接頭辞が一つであったことをその音声的類似性からも推定することができる。それは後に *m-, *p-, *b- のようにすべて両唇音性を持ったものとして再現し得るために *β- と再構できる音素をもつものである。（*m はその „Merkmal“ として *β から鼻音性、*p- は破裂音性・無声音性、*b- は破裂音性を新たに獲得、発展せしめた。）またその母音についても、既に設定せられた *m, *p, *b 系列のそれとは次元

的に異なる点を明確にして $*\alpha$ と再構し、ここに $*\beta\alpha$ -を措定することができる。ここに措定せられた再構形の機能は、 $*ba$ - と等しいのみならず、また、 ma - ; $*pa$ - の機能をも同時に含むものであったと考えられる。しかしこの $*\beta\alpha$ - の機能が更に細分化されるためには少しの期間を待たなければならなかった。何故ならば前鼻音化現象は共通祖語の初期の段階ではまだ存在しなかったからである。¹⁰⁰⁾ ただし $*r$ については R. Brandstetter のように更に古くは独立した形態素であったかも知れない($*r$ は In., Sn., Jv. などに残る接中辞 $*\text{-}\bar{a}r$ -と関係があるであろう。In. *gərigi* 〈歯のある〉[*gigi* 〈歯〉], Sn. *barudak* 〈子供達〉[*budak* 〈子供〉], Jv. *bəraḡoʔ* 〈叫び続ける〉[*bəḡoʔ* 〈叫ぶ〉], また Kw. には $*\text{-}\bar{a}r$ - に当る接中辞はなかったが, *pöh* 〈結果〉, *kas* 〈固さ〉などに接中辞を付した形が In. には残る, *pərah* 〈搾出す〉, *kəras* 〈固い〉。Sn., Jv. は複数性・連続性を表わし, In. ではそれは ($*bar$ ->) *bər*- と機能的に近い)。

この $*\beta\alpha$ - のポリネシア・メラネシア語派における発展は、インドネシア語派の言語に見られたように多様な分化を示してはいない。 $*\beta\alpha$ - は $*ma$ -, $*maN$ -, $*ma\bar{r}$ - ; $*pa$ -, $*paN$ -, $*pa\bar{r}$ - ; $*ba$ -, $*baN$ -, $*ba\bar{r}$ - となる前に $*ma$ - ; $*pa$ - ; $*ba$ -の過程を経たが、その時期における接頭辞の反映はポリネシア・メラネシア両語派に大体共通した現象として現われる。ポリネシア語派のサモア語 (Sm.), メラネシア語派のフィジ語 (Fi.) について見ると、それぞれに $*ma$ - に由来すると思われる *ma*, *me* があるが (ただし、両方とも接頭辞ではなく、むしろ独立的に前置詞として用いられているのは、そのような接頭辞も発生的にはそのみで機能し得た語根の性質を持つものであったことを物語る)、どちらにも共通した機能は「～になる」「to become」という意味を表わすことであって、Sm. *ma tupu* 〈王になる〉, Fi. *me waini* 〈酒になる〉¹⁰¹⁾、それは $*ma$ -の持っていた機能と等しい。しかし *ma*, *me* の機能はそれだけではない。更に Sm. の *ma* には「をもって・伴って」の意味もあり、*ma se 'aufa'i* 〈一房のバナナをもって〉、それは Tg. *pa*-の「与えられて」の機能を思わせる。また Sm. *fa'a*-, Fi. *vaka*- は接頭辞であるが (これは $*pa$ -と、元来は偶発的・不随意的受動を表わした $*ka$ - との二次的合成形 $*paka$ - に由来する。しかし $*paka$ - の機能は全体として「所有する・みなす・なること」を表わす。Kw. *pinakastri* 〈妻とならせられて、妻とみなされて〉[Kw. では受動形の接中辞 *-in*- を通常 *paka* に挿入して用いられる]。Sm. *f*, Fi. *v* は $*pitu$ 〈七〉>Sm. *fitu*, Fi. *vitu*, また、Sm. *'*, Fi. *k* は $*waka$ 〈根〉>Sm. *a'a*, Fi. *waka* の変化によって $*paka$ - に由来することは明らかである)、両者とも他動詞形を作り、Sm. *fa'apa'u* 〈落とす〉(*pa'u* 〈落ちる〉), Fi. *vakaukauwataka* 〈強める〉(*kaukauwa* 〈強い〉), *vaka* は語基の語頭音が *ŋ*, *k*, *ŋg* の場合 *vā* となる。*-taka* は同じく他動詞を作る接尾辞)、また、所有的に「～風に」を表わす、Sm. *fa'atamali'i* 〈親方風に・の態度で〉(*tamali'i* 〈親方〉), Fi. *vakaturaga* 〈同意〉(*turaga* 〈親方〉)。¹⁰²⁾ また、Sm. *fe*-, Fi. *vei*- という接頭辞があり、いずれも「複数性・相互性」を表わす、Sm. *feinu* 〈(複数の人が) 飲む〉(*inu* 〈飲む〉), Fi. *veikune* 〈見つめ合う〉(*kunea* 〈見る〉)。¹⁰³⁾ これについて C. E. Fox は In. *bər*- との関係を考えているが¹⁰⁴⁾、まず音韻変化的には $*ba\bar{r}$ - のみならず $*pa\bar{r}$ - との関係も否定できない。何故なら

ば *p, *b は Sm., Fi. において、それぞれ f, v に合一してしまっているからである、*pari (えい (魚名)) > Sm. fai, Fi. vai ; *baru (ハイビスカス) > Sm. fau, Fi. vau ; *but'ur (弓形) > Fi. vuðu しかしこの例において見られるように *r は Sm., Fi. とともにゼロになる (ただし、Fi. vei- の -i- がここにある理由は分からない)、とすればこれらの接頭辞は *bar-, *par- はおそらく *ba-, *pa- に対しても留保を置かなければならないことになる。要するに *bar-, *par-, *ba-, *pa-, のいずれに由来したのかは、明らかにすることができない。ただしその機能は Bt. mar-, Sn. -ar- などと等しい点がある。なお、ポリネシア・メラネシア諸言語にも前鼻音化現象が存在しなかったわけではない。特にかつての語根から新たな語基の造成に際してこの現象を起こす場合もあったことは、比較言語学的にも証明することができる (註2の泉井論文参照)。ただそれはインドネシア語派の諸言語のように生きて現われることはなく、既に固定化した形においてその痕跡を残すのみである。接頭辞についても Sm. の ga-, Fi. の nga- が若干の語に痕跡的に残されているのみであって、Sm. ḡasolo (走る, 流れる) (solo (前進する)), ḡatete (震える) (tete (震える)), Fi. ḡgali (撓る), ḡgari (搔く), これを C. E. Fox はオセアニア諸語の接頭辞として nga- としているけれども¹⁰⁵⁾、そのような接頭辞が現に活用せられているわけではない。ここに見られる ga-, nga- に対してもそれが *maN-, *paN-, *baN- のいずれに由来するのかは、全く明らかにする方法がない。要するに現在見られる限りにおいてその接頭辞は数も少なく、また機能の程度も低い。I. で述べたようにマライ・ポリネシア諸語における再構形設定の作業は、原則的にインドネシア語派の言語の比較によって行なわれなければならない所以である。

最後に、アジア大陸の諸言語とマライ・ポリネシア諸語との比較の試みは、比較的新らしいところで注目をあびたものに P. K. Benebict による説があるが、比較に際して基本的に要求されることは、両者の言語に更により根源的・究極的な再構形を措定した上で比較に供さないと、その実効性が殆んどないということである。この点は特にマライ・ポリネシア諸語の側についていえることであって、カダイ (Kadai) 語族説を立てた Benedict の理論の根本的欠陥は、実はその点にも存している。本稿でここに導かれたような *βa- は、そのような意味で、今後アジア大陸の諸言語との系統論を進めてゆく上での一つの基礎的要素ともなるであろう。

註

- 1) 詳しくは、O. Dempwolff: *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes*. I Band, Berlin/Hamburg, 1934, pp.30-34.; II Band, 1937, pp.7-12. を見よ。
- 2) N. Adriani: *Spraakkunst der Bare'e-Taal. Verhandelingen van het Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*. Deel 70, Bandoeng, 1931. においてもパレエ語の現象から彼の考えは明らかにされているが (特に, p.144~), 更に, N. Adriani: *De intensieve of activiteitsvormen in eenige talen van Indonesië. Verslagen en Mededeelingen Koninklijke*

- Akademie van Wetenschappen. Afdeling Letterkunde. 4de Reeks, Deel 9, 1908, p.319* ~. における「強調」説を支持する論文として、次のようなものがある。R. A. Kern: *De partikel pa in de Indonesische talen. Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië. Deel 92, 1934, pp.43-44, pp.120-121.*; O. Dempwolff: *loc. cit.*, II Band, p.8.; J. Gonda: *Indonesian linguistics and general linguistics. Lingua, Vol. 3, 1952, p.31.*; 泉井久之助: 言語比較における音韻対応関係設定の不確定性について——印欧語と主としてハワイ語に関して——。『言語研究』第41号, 1962, p.4.
- 3) R. A. Kern: *loc. cit.*, pp.5-121. この論文も前鼻音化現象の説明は、専ら Adriani によっている。その記述は豊富な具体的言語事実をもとに絶えず実証的・羅列的であるが、全体としての有機性の上に立って説くことに欠けるため、時に焦点がぼやけ、そのいうところは晦渋である。C. A. Mees: *Ilmu Perbandingan Bahasa2 Austronesia. Kuala Lumpur, 1967, pp.88-108.* ただし、*ba- 系列に関しては考え不足がある。もっともこの人はかつてインドネシア語の (pa->) pə- を (paN->) pəN-, (*paɾ->) pəɾ- の単なる「異形」, „verschillende vorm” と考えていたのであるから (C. A. Mees: *Beknopte Maleise Grammatica. 's-Gravenhage/Semarang/Soerabaja/Bandoeng, 1938 (3rd ed.), p.158.*; C. A. Mees: *Tatabahasa Indonesia. Bandung, 1953 (3rd ed.), p.49.*), 考え方における大きな飛躍といわなくてはならない。
- 4) 例えば古くは、C. O. Blagden: *The Kota Kapur [W. Bangka] inscription. Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society. Vol.64, 1913, p.70.* また、彼を支持する G. Coedès: *Les inscriptions malaises de Çrivijaya. Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient. Tome 30, 1930, p.63.* のほか、現在も、S. T. Alisjahbana: *Dari Perdjuangan dan Pertumbuhan Bahasa Indonesia. Djakarta, 1957, pp.129-144.*
- 5) W. Aichele: *Die altmalaiische Literatursprache und ihr Einfluss auf das Altjavanische. Zeitschrift für Eingeborenen-Sprache. Beiheft 33, 1943, p.46~.*
- 6) A. Teeuw: *The history of Malay language. Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde. Deel 115, 1959, pp.138-156.* 特に, p.144~.
- 7) E. M. Uhlenbeck: *Indonesia and Malaysia. Current Trends in Linguistics. Vol.2, The Hague/Paris, 1967, p.853.*
- 8) H. Kähler: *Grammatik der Bahasa Indonesia. Wiesbaden, 1965, p.28.*
- 9) S. M. Zain: *Djalan Bahasa Indonesia. Djakarta, 1954, (9th ed.), p.35.* そこに掲げられた *Sedjarah Melaju* からの例, *Maka Sultan Mansur Sjah memberi titah kepada Bendahara menjuruh membuat istana dan balairung. Maka Bendaharapun mengerahkan orang berbuat istana dan balairung.* 〈サルタン・マンスル・シャーは大臣に宮殿と御堂を造るよう詔したので、大臣もそれを造るために人々を召集した〉
- 10) A. Prawirasuganda / S. Sauni: *Kitab Peladjaran Bahasa Djawa-Kuna. Djil.1. Bandung, 1960 (4th ed.), pp.23-24.* しかしそこでいっている (*ma->) ma- が mar- の r を落としたものとする説明は、勿論、誤りである。なお, marapwi は中部ジャワの Gunung Merapi (ムラピ山) として火山

- 名に残り, marhyag の hyag は In. yag(-yag) 〈神〉に当たるが, *baryag という言葉はない。ただし, In. の marhaen 〈無産階級〉は Kw. marhyag > Jv. marhaen を新たに取入れたのである。
- 11) P. J. Zoetmulder / I. R. Poedjawijatna: *Bahasa Parwa Tatabahasa Djawa Kuno*. Djil. 1. Djakarta, 1954, pp.58-59.
- 12) R. Satjadibrata: *Kamus Indonesia-Sunda*. Djakarta, 1952, p.13.; R. M. Wirakusumah / I. B. Djajawiguna: *Kandaga Tatabasa*. Bandung / Djakarta, 1962, pp.37-38.
- 13) R. A. Kern: *loc. cit.*, p.117.
- 14) R. Satjadibrata: *loc. cit.*, pp.11-12.; R. M. Wirakusumah / I. B. Djajawiguna: *loc. cit.*, p.34.
- 15) N. Adriani: *loc. cit.*, 1931, pp.234-235.; R. A. Kern: *loc. cit.*, p.116.
- 16) 要するに, 語根の語末以外に r があると bər- は bə- になるというのである。これを後述する pə-, pər- の関係についてもあてはめる。O. Dempwolff: *Einführung in die malaiische Sprache*. Berlin, 1941, p.56.; Oemar Sastradiwirya: *Penguraian Kalimat*. Djakarta / Amsterdam, 1954, p.75.; H. Kähler: *loc. cit.*, p.110.; R. R. Macdonald/Soenjono Darjowidjojo: *Indonesian Reference Grammar*. Washington, 1967, p.39. 例えば, bərumah (bə-rumah) 〈住む〉, bəkərja (bə-kərja) 〈働く〉のように。しかし上の説明にもかかわらず, bərlari (bə-r-lari) 〈疾走する〉, bərrapat (bə-r-rapat) 〈集会する〉などのようにその説明からはずれる例も多く現われる。とすれば上の説明は無意味であって, 現在, その間に機能的差異はないけれども, bə-, bər- はそれぞれ ba-, *bar- に由来するとしなければならない (bərrapat は bərapat となることもある。しかし意味の相違は全くない)。
- 17) G. A. J. Hazeu: *Gajösch-Nederlandsch Woordenboek met Nederlandsch-Gajösch Register*. Batavia, 1907, p. XIII, p.85, p.500. didòg は bədidòg とともに bəddidòg ともなり意味は変わらない, 〈朗詠会を催す〉。pp.499-500. 同様に, R. A. Kern: *loc. cit.*, p.115.
- 18) A. Hardeband: *Dajacksch-Deutsches Wörterbuch*. Amstedam, 1859, p.47.
- 19) 泉井: *loc. cit.*, p.1.; 泉井久之助: 『言語の構造』, 東京, 1967, pp.101-104.
- 20) ここに現われる ba-, baN- はマライ・ポリネシア共通祖語の再構形 *ba-, *baN- に近い音であって, これらの単語 (語基) が相当古い時期に出来上っていたことを物語る。現在, bə-, bəN- になっているのは, かつての独立的な語根性から次第に接頭辞的性格を増し, それにはアクセントがつかなくなったからである。このことは m, p 系列についても同様。bar- については後に子音を従える例がなく (bar-kas 〈大型ボート〉はオランダ語からの借用語), 現在の語基にその痕跡を求めることが困難である。また, barag 〈物〉は ba-rag なのか, bar-ag なのか明らかでない。bərapa 〈幾ら〉 (< bər-apa 〈何〉) は既に新しい段階で形成された語基である。bəndug 〈堰〉, bəduq 〈襦袢〉 (duq は古い語根) それぞれにおける bə-, bəN- もこれらの語基がより新しい形成になることを意味する。
- 21) R. A. Kern: *loc. cit.*, p.117.
- 22) R. A. Kern: *loc. cit.*, p.118.
- 23) Kw. 直系の言語として Jv. のほか, マドゥラ語がある。それには語基として mammag 〈容易な〉, mann'ar 〈幽霊の一種〉, mənəg 〈勝つ (In. mənag)〉, mən'n'or 〈光る〉, məggo 〈寧ろ〉など語中に, -mm-, -nn', -nn-, -gg- を含む例がある。これらは語頭が鼻音の場合でも, かつてはこの現象を起こし

た痕跡であろうか。もっとも、マドゥラ語は「子音重複現象」“gemination”を激しく行なった言語であり、直ちにこの例を前鼻音化現象に関連づけ得ないかも知れない。

- 24) H. H. Juynboll: *Kawi-Balinesesch-Nederlandsch Glossarium op het Oudjavaansche Rāmāyaṇa*. 's-Gravenhage, 1902.; H. H. Juynboll: *Oudjavaansch-Nederlandsche Woordenlijst*. Leiden, 1923.
- 25) Tjabang Bagian Bahasa—Jogjakarta Djawatan Kebudayaan Kem. P. P. & K.: *Ādiparwa*. Djil. 1, 1958, p.46.
- 26) *Ādiparwa. loc. cit.*, Djil. 1, p.63.
- 27) Ki Darmasiswaja: *Paramasastra Djawa Kanggo Umum*. Klaten, 1955, pp.58-59.; Antunsohono: *Reringkesaning Paramasastra Djawa*. I, Jogjakarta, 1960 (3rd ed.), p.37.
- 28) Jv. において h- で始まる語根は、丁度フランス語のように若干の外来語を除いて稀である。h の音素としての機能負担量は殆んどなく、母音が語頭音である語根との区別がつかない。それは現代ジャワ文字で h 音と母音とが区別し分けられないこととも関係している。ただし、固有名詞を書くために二次的に作られた特別の母音字はある。
- 29) 個々の具体的事実によって [ma]N- に13~15種, [m]a- に5~6種の機能的区別を設ける人もいるが、それぞれの基本概念は2. Kw. で述べたことにつくる。Antunsohono: *loc. cit.*, pp.39-40, p.51.; Ki Darmasiswaja: *loc. cit.*, p.63, pp.131-134. ただし、Antunsohono は [h]a- と ma- とを区別して扱い、ma- は接中辞 -um- に由来すると説く (Antunsohono: *loc. cit.*, p.51-53.). -um- は Kw. にも存在し、機能的には maN- との区別が明瞭でなくいずれも語基を(他)動詞化する接辞として用いられている(例えば、manugsug (<maN-sugsug), sumugsug (<-um-sugsug), 意味は両者とも〈持成す、迎える〉)。ところが語基が p, b, m, w, 母音の場合、-um- は語頭に置かれ、更に u を落とすことが多い。Jv. mulug 〈(腕、手を)広げる〉(<-um-ulug 〈鷹の一種〉)のように。このように語頭に m- が現われることによって、この m- を ma- と考えようとするのであるが、もとよりこの考えが誤りであることはいうまでもない。Jv. においてこの -um- はワヤン芝居の台詞に多く現われるが、口語ではあまり用いられなくなっている。(E. C. Horne: *Beginning Javanese*. New Haven / London, 1961, p.400.)
- 30) 前鼻音化現象によって現われた g- は、次が語根(=一音節)の場合(wet), ga- となる。
- 31) A. C. Vreede: *Bijdragen tot de Javaansche Etymologie*. Leiden, 1908, v+45 pp. これは小さな書物であるけれども、Jv. の語基は更により小さな単音節の語根から成立っていることを比較的に示し、またそれら単音節の語根がそれまで Roorda によっていわれていたような“onomatopoeic”では必ずしもないことを明らかにした先駆的論文である。なお、この書物の評価については、E. M. Uhlenbeck: *A Critical Survey of Studies on the Languages of Java and Madura*. 's-Gravenhage, 1964, p.60.; C. A. Mees: *loc. cit.*, 1967, p.66. 参照。
- 32) J. V. Panganiban: *Fundamental Tagalog*. Manila, 1939 (2nd ed.), p.40, pp.97-98.
- 33) R. Alejandro: *A Handbook of Tagalog Grammar*. Manila, 1963 (2nd ed.); P. S. Aspillera: *Basic Tagalog*. Manila, 1964 (4th ed.).
- 34) М.Крус / С. П. Игнашев: *Тагальско русский словарь*. Москва, 1959. もっとも pp.354-355. においてその機能上の区別を示してはいる。

- 35) 以上の例は、それぞれ L. Bloomfield: *Tagalog Texts with Grammatical Analysis*. Illinois, 1967 (Rep. ed.), p.283, p.220, p.228. による。
- 36) F. R. Blake: Tagalog Verb. *Journal of the American Oriental Society*. Vol. 36, 1917, p.399.; J. V. Paganiban: *loc. cit.*, p.24.; C. Lopez: Reduplication in Tagalog. *Bijdragen tot de Taal-, Land en Volkenkunde*. Deel 106, 1950, p.261.; P. S. Aspillera: *loc. cit.*, p.118. など。
- 37) J. V. Paganiban: *loc. cit.*, p.93.; Л. И. Шкарбан: Опыт систематизации некоторых словообразовательных процессов в тагальском языке. *Спорные вопросы строя языков Китая и Юго-Восточной Азии*. Москва, 1964, p.175.; 同様に, М. Крус / Л. И. Шкарбан: *Тагальский Язык*. Москва, 1966, p.44.
- 38) E. Wolfenden: *A Re-statement of Tagalog Grammar*. Manila, 1961, p.15.
- 39) J. D. Bowen: *Beginning Tagalog*. Berkeley / Los Angeles, 1969 (3rd ed.), p.232~.
- 40) L. Bloomfield: *loc. cit.*, p.294.
- 41) F. R. Blake: *loc. cit.*, p.399.; J. V. Paganiban: *loc. cit.*, p.93.; C. Lopez: *loc. cit.*, p.264.; E. Wolfenden: *loc. cit.*, p.14.; Л. И. Шкарбан: *loc. cit.*, p.175.; 同様に, М. Крус / Л. И. Шкарбан: *loc. cit.*, p.44.
- 42) L. Bloomfield: *loc. cit.*, p.239.; J. V. Paganiban: *loc. cit.*, p.93, p.97.
- 43) E. Wolfenden: *loc. cit.*, p.14.
- 44) F. R. Blake: *loc. cit.*, p.397.; C. Lopez: *loc. cit.*, p.241.; E. Wolfenden: *loc. cit.*, p.14.
- 45) L. Bloomfield: *loc. cit.*, p.239.
- 45-a) F. R. Blake: *loc. cit.*, p.397.; P. S. Aspillera: *loc. cit.*, p.43.
- 46) L. Bloomfield: *loc. cit.*, p.226, p.233.
- 47) J. V. Paganiban: *loc. cit.*, p.87.
- 48) L. Bloomfield: *loc. cit.*, p.199.
- 49) Idrus: *Dari Ave Maria ke Jalan Lain ke Roma*. Kuala Lumpur, 1963 (Edisi I Malaya), p.103.
綴字はインドネシア語式に改め直した。
- 50) N. St. Iskandar: *Pengalaman Masa Ketjil*. Djakarta, 1966, p.35.
- 51) 巴赫波命: 『印度尼西亜語構詞法』。Djakarta, 1963, p.119. 例文は Njoto のもの。
- 52) C. A. Mees: *loc. cit.*, 1953, p.160.
- 53) A. K. Mihardja: *Atheis*. Melaka, 1969 (Chetakan II Malaysia), p.10. 綴字はインドネシア語式に改め直した。
- 54) R. A. Kern: *loc. cit.*, p.53.
- 55) N. Adriani: *loc. cit.*, 1931, p.160. Br. では語頭, 語末の *ɾ は原則的にゼロにするが, aki 〈筏〉 (<*ɾakit, In.rakit), turu 〈眠る〉 (<*tiɖur [tuɖur], In. tidur, Tg. tulog), 語中の場合ゼロになるものと -g になるものとがあり, daa 〈血〉 (<*ɖarah, (*ɖərəh) In. darah, Tg. dugo?), daga 〈海〉 (<*ɖarat, In. darat 〈陸〉, Tg. darat 〈海〉), その間の規則は明らかでない (pp.99-106). *maɾ- は接頭辞的性格のもとに後に何らかの語根を従えて現われるのであるから, *maɾ- の *ɾ は当然語中に位

置したと考えなければならない。従って、*maɾ-* が *mo-* になったとすべき決定的理由は存在しない。ただし、*maɾ-* の語根の段階においてこの変化が起こったとすれば、そこに一抹の理由を附することも可能である（註20参照）。またその母音 *o* についてもそれは一般に **ə* に由来するのであって、例えば *doge* 〈聞く〉（<**dəŋər*, In. *dəŋar*, Tg. *dinig* [dinig]）, 強いて **a* に関係づけるとすればそれは例外的変化としなければならなくなる。

- 56) N. Adriani: *loc. cit.*, 1931, p.146~, p.160~, p.172~.
- 57) C. A. Mees: *loc. cit.*, 1969, p.90, p.94.
- 58) H. H. Juynboll: *loc. cit.*, 1923, *parujar* の項目。
- 59) *Ādiparwa: loc. cit.*, Djil. 1, p.129.
- 60) J. G. H. Gunning: *Bhāratayuddha kakawin. Bhārata-Yuddha, Oud-Javaansch heldendicht.* 's-Gravenhage, 1903, I, 9. 本稿ではジャワ文字をローマ字化する。
- 61) *Ādiparwa: loc. cit.*, Djil. 2, p.52.
- 62) *Ādiparwa: loc. cit.*, Djil. 1, p.26.
- 63) *Ādiparwa: loc. cit.*, Djil. 1, p.61.
- 64) *Ādiparwa: loc. cit.*, Djil. 1, p.93.
- 65) *Ādiparwa: loc. cit.*, Djil. 1, p.61.
- 66) 多数いジャワ語文法書でこの点を区別して説明しているのは, M. Prijohoetomo: *Javaansche Spraak-kunst*. Leiden, 1937, pp.110-114. のみであろう。しかし、そこにも両者に共通した機能, 「行為」 „*handeling*”, 「行為者」 „*handelenden persoon*”, 「方法」 „*middel*” などが現われるが、これでは両者の根本的差異を説き明かすに至っていない。
- 67) Ki Hadiwidjana: *Sastra Gita Witjana*. Jogjakarta, 1953, p.12. 本稿ではジャワ文字をローマ字化する。
- 68) M. Prijohoetomo: *loc. cit.*, pp.111-112.
- 69) M. Prijohoetomo: *loc. cit.*, pp.126-128. この書の区別の仕方においても、両者に共通した機能, 「場所」 „*plaats*”, 「状態」 „*betrekking*”, 「方法」 „*middel*”, 「行為の目的または結果」 „*het object of resultaat der handeling*” が現われるが、この説明のみでは差違でなく両者が等しいということにもなるであろう。
- 70) L. Bloomfield: *loc. cit.*, p.299, p.225, p.196.
- 71) E. Wolfenden: *loc. cit.*, p.11.
- 72) F. R. Blake: *loc. cit.*, p.399.; J. V. Panganiban: *loc. cit.*, pp.40-41.; E. Wolfenden: *loc. cit.*, p.26.; L. Bloomfield: *loc. cit.*, pp.298-300. なお, Л. И. Шкарбан: *loc. cit.*, p.175.; 同様に, М. Крус / Л. И. Шкарбан: *loc. cit.*, p.45. は「使役性」 ‘*каузативность*’ の機能とする。
- 73) L. Bloomfield: *loc. cit.*, p.298, p.301.
- 74) J. V. Panganiban: *loc. cit.*, p.41.
- 75) J. V. Panganiban: *loc. cit.*, p.41.; E. Wolfenden: *loc. cit.*, p.26.; L. Bloomfield: *loc. cit.*, pp. 224-226.
- 76) J. V. Panganiban: *loc. cit.*, p.42.; P. S. Aspillera: *loc. cit.*, p.115.; E. Wolfenden: *loc. cit.*,

- p.26.; L. Bloomfield: *loc. cit.*, p.226.
- 77) L. Bloomfield: *loc. cit.*, p.234.
- 77-a) R. A. Kern: *loc. cit.*, p.119.
- 78) A. A. Fokker: *Inleiding tot de studie van de Indonesische syntaxis*. Groningen / Djakarta, 1951, p.156. Djonhar のインドネシア語訳: *Pengantar Sintaksis Indonesia*. Djakarta, 1960, p.110.
- 79) A. A. Fokker: *loc. cit.*, p.156, pp.217-218.; Djonhar: *loc. cit.*, p.110, pp.153-154.
- 80) 言及するのは、わずかに M. H. Rambitan: *Bahasa Indonesia*. Deel 2, 1949, Djakarta, p.84.; S. Zainu'ddin: *Pohon Bahasa*. Djil. 1, 1960 (5th ed.), p.41.; 巴赫波侖: *loc. cit.*, p.75, p.101.; M. Lubis: *Paramasastra Landjut*. Amsterdam / Djakarta, 1952 (4th ed.), p.120.; C.A. Mees: *loc. cit.* 1953, p.50.
- 81) 巴赫波侖: *loc. cit.*, p.75.
- 82) Oemar Sastradiwiry: *loc. cit.*, p.77.; M. Lubis: *loc. cit.*, pp.49-50.; S. M. Zain: *loc. cit.*, pp.47-48.; R. I. W. Dwidjosusana / H. Dwidjoseputro: *Parama Sastra Indonesia Modern*. Surabaya, 1965 (2nd ed.), p.48.
- 83) 古くは、A. Tugault: *Grammaire de la langue Malaye ou Malaise*. Paris, 1868, pp.52-53. から、最新の R. R. Macdonald / Soenjono Darjowidjojo: *loc. cit.*, pp.99-103. に至る殆んど大部分の文法書において例外なく。
- 84) 註16に記した書物のほか (なお、Oemar Sastradiwiry: *loc. cit.*, pp.76-77.; H. Kähler: *loc. cit.*, pp.114-115. に pə-, pər- の説明がある), A. A. Fokker: *Beknopte Grammtica van de Bahasa Indonesia*. Groningen / Djakarta, 1950 (4th ed.), p.38. その他、pə-, pər- 間の差違には全く問題を置かず、単に pə(r)- として説明している書物が多いが、また pə- と pəN- とを同一視している場合も多い。H. Munaf: *Tatabahasa Indonesia*. Djil. 2, Djakarta, 1952 (2nd ed.), pp.97-100, p.156.; A. C. Теселкин / Н. Ф. Алиева: *Индонезийский Язык*. Москва, 1960, p.18. など。いずれにしろ言語史的事実に基づいた接頭辞の機能に対する考察を欠く点で変りはない。また、A. Teeuw の次の論文も pə- については全く触れない。A. Teeuw: Some Problems in the study of word-classes in Bahasa Indonesia. *Lingua*. Vol. 11., 1962, pp.409-421.
- 85) H. Kähler: *loc. cit.*, p.114.
- 86) 第 I, 第 II 主語の概念については、崎山: インドネシア語受動態考 —— その二重主語文的解釈——。『大阪外国語大学学報』第21号, 1969, pp.59-75. 参照。
- 87) S. T. Alisjahbana: *Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia*. Djil. 2, Djakarta, 1963 (24th ed.), p.28.; Oemar Sastradiwiry: *loc. cit.*, p.77.; R. I. W. Dwidjosusana / H. Dwidjoseputro: *loc. cit.*, p.48.; M. Lubis: *loc. cit.*, p.97.; S. M. Zain: *loc. cit.*, p.39.; C. A. Mees: *loc. cit.*, 1953, p.50, pp.174-175.; A. C. Теселкин / Н. Ф. Алиева: *loc. cit.*, p.18. など。この場合の pər- は məmpər- に由来することを正しく認識し、この pər- の限界を論じているのはわずかに、H. Kähler: *loc. cit.*, p.123.; R. R. Macdonald / Soenjono Darjowidjojo: *loc. cit.*, pp.94-96. なお、R. Roolvink の次の論文は pər- / məmpər- に触れるものであるが、R. Roolvink: The passive-active per- / ber- // per- /

mæmpər- correspondences in Malay. *Lingua*. Vol. 15, 1965, pp.320-337., 要するに古マライ文学の資料からは能動形他動詞を作る bər- に対して受動形を作る pər- が補い合っていたが, bər- の自動詞性が強まることによって pər- は bər- を補い合うものとして失ない, pər- はその対立物として新たに能動形他動詞を作る mæ- から mæmpər- を導き出した, とするのである。果して言語はこのような二元的対立のもとにのみ機能しているものであろうか。能動・受動の範疇論を強いてインドネシア語に持込む傾向はここにも見られる(崎山: loc. cit. 参照)。また, mæm- + pər- が *mæmər- でなく mæmpər- となることについて, 彼は次のような説明をする。それは In. mæmpərhatikan (注意を向ける) (hati (心)) が唯一の例外として mæmərhatikan ともなる。この場合 pərhati が「語基」「base」であるが (!!), mæmpər- が *mæmər- とならないのは, この pər- が「base」に属するものではなく接頭辞であって mæmpər- はそのような二つの接頭辞の結合したものである (p.314)。しかしこれは分かりきった当然のことである。mæmpərhatikan の「語基」はあくまで hati であって, それが例外的に mæmərhatikan のようになるのは, 前鼻音化現象 p → m への類推による俗語形だからである。mæmpər- の -mp- は共通祖語における前鼻音化現象形式を残存せしめる古い形成になる複合形の接頭辞であり, その発生は `p, *m 系列と相前後するものであったろう。In. にはこのような -mp- を残す語も多いのである。mæmpunyai (所有する) (punya (持つ, ~の)), mampu (能力ある), ampu (支持), æmpu (使手, 名人, 大師), mæmpəlam (マンゴー) など。なお, mæmpəlam の mæN- を接頭辞として考察した, R. A. Kern: Maleisch mæmpəlam en verwante vormen. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië*. Deel 90, 1933, pp.145-147. 参照。

- 88) 更に, 巴赫波命: loc. cit., pp.125-126. 参照。
- 89) H. B. Jassin: *Kesusastraan Indonesia Modern dalam Kritik dan Esei*. Djil. 1, Djakarta, 1962 (3rd ed.), p.49, p.59.
- 90) A. П. Павленко: *Сунданский Язык*. Москва, 1965, pp.52-53.; H. J. Oosting: *Soendasche Grammatica op Last van het Gouvernement van Ned. Indie*. Amsterdam, 1884, pp.65-70.
- 91) R. M. Wirakusumah / I. B. Djajawiguna: loc. cit., p.34-35.
- 92) G. A. J. Hazeu: loc. cit., p.566-567.
- 93) N. Adriani: loc. cit., p.156~, p.168~, p.172~.
- 94) R. A. Kern: loc. cit., 1934, pp.17-18.; C. A. Mees: loc. cit., 1967, pp.104-105.
- 95) R. Brandstetter: *An Introduction to Indonesian Linguistics*, translated by C. O. Blagden. London, 1916, p.159, p.169, pp.172-173.; そのインドネシア語訳: *Katakerdja dalam Bahasa 2 Indonesia*. Djakarta, 1957, p.24, p.35, pp.39-40.
- 96) В. Д. Аракин: *Индонезийские Языки*. Москва, 1965, pp.60-61.; 同様に, В. Д. Аракин: Типологические особенности словообразовательной системы в некоторых языках индонезийской группы. *Языки Юго-Восточной Азии*. Москва, 1967, pp.193-212.
- 97) A. Teeuw: Old Balinese and comparative linguistics. *Lingua* Vol. 14, 1965, pp.271-284.
- 98) E. Wolfenden: loc. cit., pp.16-18.; F. R. Blake: loc. cit., pp.397-403.
- 99) M. Vanoverbergh: *Iloko Grammar*. Baguio, 1955, pp.131-136.

- 100) 崎山：マライ・ポリネシア語族におけるブリ語（ハルマヘラ島）の系統。『東南アジア研究』第7巻第3号，1969，p.287.
- 101) C. C. Marsack: *Teach Yourself Samoan*. London, 1962, p.92.; C. M. Churchward: *A New Fijian Grammar*. Sydney, 1941, p.24
- 102) C. C. Marsack: *loc. cit.*, pp.75-76.; C. M. Churchward: *loc. cit.*, p.21, pp.60-61.
- 103) C. C. Marsack: *loc. cit.*, p.36.; C. M. Churchward: *loc. cit.*, pp.20-21, pp.73-74.
- 104) C. E. Fox: Prefixes and their functions in Oceanic languages. *Journal of the Polynesian Society*. Vol.57, 1948, p.250.
- 105) C. E. Fox: *loc. cit.*, pp.235-248.

引用言語主要辞書書目（掲載順）

カウイ語 (Kw.)

H. H. Juynboll: *Kawi-Balineesch-Nederlandsch Glossarium op het Oudjavaansche Rāmāyaṇa*. 's-Gravenhage, 1902.

H. H. Juynboll: *Oudjavaansch-Nederlandsche Woordenlijst*. Leiden, 1923.

ジャワ語 (Jv.)

W. J. S. Poerwadarminta: *Baoesastra Djawa*. Groningen / Batavia, 1939.

S. Prawiroatmodjo: *Bausastra Djawa-Indonesia*. Surabaya, 1957.

P. Jansz: *Practisch Javaansch-Nederlandsch Woordenboek*. Semarang / Soerabaja / Bandoeng / 's-Gravenhage, 1932.

Th. Pigeand: *Javaans-Nederlands Handwoordendoek*. Groningen / Batavia, 1938.

タガログ語 (Tg.)

J. V. Panganiban: *Talahuluganang Pilipino-Ingles*. Manila, 1966.

М. Крус/С. П. Игнашев: *Тагальско-Русский Словарь*. Москва, 1959.

ンガジュ・ダヤク語 (Dj.)

A. Hardeland: *Dajacksch-Deutsches Wörterbuch*. Amsterdam, 1859.

ガヨ語 (Gj.)

G. A. J. Hazeu: *Gajösch-Nederlandsch Woordenboek met Nederlandsch-Gajösch Register*. Batavia, 1907.

スンダ語 (Sn.)

R. Satjadibrata: *Kamoes Soenda-Indonesia*. Djakarta, 1950 (2nd ed.).

R. Satjadibrata: *Kamus Basa Sunda*. Djakarta, 1954 (2nd ed.).

S. Coolsma: *Soendaneesch-Hollandsch Woordenboek*. Leiden, 1930 (Reprinted ed.).

マドゥラ語

P. Penninga / H. Hendriks: *Practisch Madoereesch-Hollandsch Woordenboek*. Semarang / Soerabaja / Den Haag, 1913 (1st ed.).

サモア語 (Sm.)

G. B. Milner: *Samoan Dictionary, Samoan-English English-Samoan*. London, 1966.

Le. P. L. Violette: *Dictionnaire Samoa-Français-Anglais*. Paris, 1879.

その他の言語について、インドネシア語 (In.) は省略するが、トバ・バタク語 (Bt.), バレエ語 (Br.),
フィジ語 (Fi.) はそれぞれ註 57, 15, 101 に記した文献による。

なお、例文として掲げた文はすべて、各言語ごとに定められた正規の綴字によって示したが、それ以外は音素表記を採用した。